

東京大学トライリンガルプログラム・中国語

2023 年度南京サマースクール報告書

～3年間の完全オンラインから4年振りの現地渡航～



全体日程

月日	午前(8:00~12:00)	午後(13:00~17:00)
5月10日(水)	選抜試験	
8月9日(水)	中国語授業4コマ	始業式
8月10日(木)	中国語授業4コマ	南京大 학교内見学
8月11日(金)	中国語授業4コマ	泥人形体験・太極拳(1)
8月14日(月)	中国語授業4コマ	中国語講演: 明代の歴史と鄭和の七回の海洋航海
8月15日(火)	中国語授業4コマ	大統領府見学
8月16日(水)	中国語授業4コマ	泥人形体験・太極拳(2)
8月17日(木)	中国語授業4コマ	南京博物館見学
8月18日(金)	中国語授業4コマ	南京大学生との交流(1)
8月21日(月)	中国語授業4コマ	田家炳高校日本語クラスの生徒との交流
8月22日(火)	中国語授業4コマ	企業訪問・夫子廟と秦淮河の観光
8月23日(水)	中国語授業4コマ	泥人形体験・太極拳(3)
8月24日(木)	中国語授業4コマ	中国茶芸
8月25日(金)	中国語授業4コマ	南京大学生との交流(2)
8月28日(月)	中国語授業4コマ	中国語講演: 中国経済
8月29日(火)	中国語授業4コマ	
8月30日(水)	中国語授業4コマ	修了式
9月30日(火)	反省会	

目次

活動報告

1. 授業

- 1-1. 中国語精読の授業 寺嶋 佑太郎
- 1-2. 中国語会話の授業 仲本 梨乃奈
- 1-3. 中国文化体験 印藤 直晃

2. 中国語講演

- 2-1. 「明代歴史及鄭和七下西洋」江蘇国際文化交流中心・趙志剛教授（8月14日） 松浦 知希
- 2-2. 「中国経済」南京大学海外教育学院・陳志紅副教授（8月28日） 飯田 奈那

3. 現地での交流

- 3-1. 田家炳高中の高校生と南京大学学生との交流 田中 渚
- 3-2. 江蘇蘇美達五金工具有限公司での見学 木村 眞子

4. 参観・観光

- 4-1. 中山陵・南京博物院 韓 美嘉
- 4-2. 揚州旅行 並木 勇輝

印象記

5. 中国語授業担当教員（南京大学）からのコメント

- 5-1. 汪天源先生 日本語訳・韓 美嘉
- 5-2. 王大瑩先生 日本語訳・松浦 知希

6. 参加学生の感想

- 6-1. 南京の街で感じた、成長の兆し 松浦 知希

- 6-2. 日中間の架け橋を考える・・・寺嶋 佑太郎
- 6-3. 生の中国に触れて・・・木村 眞子
- 6-4. 南京サマースクール全体の感想・・・田中 渚
- 6-5. 語学・文化・絆・・・仲本 梨乃奈
- 6-6. プログラム全体の感想・・・飯田 奈那
- 6-7. 「変わる中国」と「変わらない中国」・・・並木 勇輝
- 6-8. 食事から振り返る南京サマースクール・・・印藤 直晃

反省会

- 7. オンライン反省会（9月26日）・・・寺嶋 佑太郎（司会）

おわりに

流動化し断片化する世界の中で・・・伊藤 徳也

執筆学生一覧

活動報告

1. 授業

1-1. 中国語精読の授業

寺嶋 佑太郎

私からは、平日午前に行われた中国語の授業のうち、読解を主とした総合クラスについて紹介する。この授業は、王大莹先生のもと、オンラインで配られた教科書『博雅汉语』を精読する形で行われた。私は日本でも精読の授業を英語・中国語問わず受講したことがあるが、私が感じた最も大きな違いは、その深さである。重要な単語や構文が出てきたらその説明がなされるのは同様であるが、王先生は、それについての事細かな用法と、それを実際に使ってみる練習問題、そして文章のテーマや構造を提示してくださった。さらに、授業冒頭に1人ずつ中国で感じた面白い事柄を発表する機会や最終日の前日に思い思いの演出をする「汉语秀」があり、東京大学でいうところの英語一列と ALESA、FLOW を組み合わせたような授業だった。

実際、卒業式が題材となっている文章において、先生はまず今年举行された南京大学卒業式の様子を紹介なさり、文章のテーマが「不要抛弃学问（学問を放棄してはならない）」であることに触れられたのちに、段落ごとの関係性が、①言葉を贈る、②学問の重要性を述べる、③例を用いて学問のなされ方を紹介する、④将来への希望を述べる、というものであることを確認された。その後は、「学问」という単語が「有学问」と「做学问」とで意味が異なるということや、「不得已」という語句が単独で用いられる場合と連体修飾・連用修飾で用いられる場合、「万不得已」のような常用表現になっている場合とで分類して考えられることを教えてくださった。さらに、課が終わると文章の穴を埋める形での単語テストを行ってくださり、私たちは中国語を実践的な形で深く学ぶことができた。

また、授業冒頭の発表についても、学びが非常に多かった。私たちにはそれぞれ、ことわざや文化の特徴について PowerPoint を用いて発表する機会が用意されていたのだが、まずそれにより、私自身が意識的に中国を見つめることができた。授業や文化交流の時間に限らないあらゆる時間において、発表のための題材探しを契機として、中国の文化や日本との違いを考えることができた。実際、私は南京と東京の物価の違いに着目し、ケーキのような贅沢品においては双方に大きな差が見られないことを具体的なチェーン店の価格を比べることに基づいて示し、原因の考察とともに発表したのであるが、それ以外にも、街なかに多く存在する標語や公共交通機関の運賃の安さのような多くの特色を体感し、それについて自ら百度などの中国独自の検索エンジンで調べたり、現地の学生に直接尋ねたり

することを通して深く考えることができた。次に、メンバーの発表を聞くことで、知ってはいても深く考えてこなかったテーマやあまり知らなかった言葉に触れることができた。各々の関心のあるテーマの発表を聞くことで、自分の関心ある分野に偏りがちだった考察の幅を広げ、多種多様な観点から中国を見ることができた。メンバーの発表の中には、山寨（模倣品）への考え方についてのものや、道路の名前が全く別の場所の地名になっていることについてのものがあったが、私ひとりであれば「中国らしい」と感じるにとどめて流してしまったであろう、こういったテーマについて深く考える機会を、メンバーがいたことで得ることができた。さらに、発表後の質疑応答の場面で、日本であれば質問が無くなると切り上げてしまうところを、質問が出なくなっても先生が指名して質問を促してくださったことで、より積極的に発表を聞き、自分の考えを持つことを後押しされた。このように、発表によっても、中国について深く学ぶことができた。

授業を通じて私は、文章の読解のみならず、中国の文化も学ぶことができた。もちろんそれは日本と共通することが多いのであるが、私が感じた日本と異なる中国の特色は、文章に偉人の話や四字熟語を多く用いていることである。中国では昔からの教訓を特に重んじていると聞いたことがあるが、日本でそれらが使われる割合と比べても桁外れに高かった。いかに歴史や語彙を学んできたかが、「有学问」たりえるかに日本以上に関わってくるのであろう。もっとも、南京で多くの人々と交流した際には、会話の中でそういった文言はまったく登場しなかった。私の中国語レベルを慮って平易な会話にしてくれたのかもしれないし、交流したのはほとんどが学生であったため、若年層ではそういう習慣がないのかもしれない。そもそも口語ではあまり使わないものなのかもしれない。いずれにせよ、そうした側面を実際に体感することができた。

1-2. 中国語会話の授業

仲本 梨乃奈

3週間の南京研修期間中、平日の午前中は毎日4コマの中国語の授業を受けていました。2科目の授業のうち、【汉语一】では主に読解力を、【汉语二】では主に会話力を高めることを目的とした授業をしていただきました。ここでは【汉语二】の授業について振り返りたいと思います。

授業を担当してくださったのは汪老师という女性の先生でした。初回授業で自己紹介をしたのち、10分間の休憩を挟んで授業を再開したときにはもうすでに9人全員の顔と名前を一致させていたことに、とても驚いたのを覚えています。授業中や休み時間には、私たちの性格や好みまで把握していると感じられるような問いかけやおしゃべりをしてくださり、生徒ひとりひとりに向き合ってくれたとても素敵な先生でした。

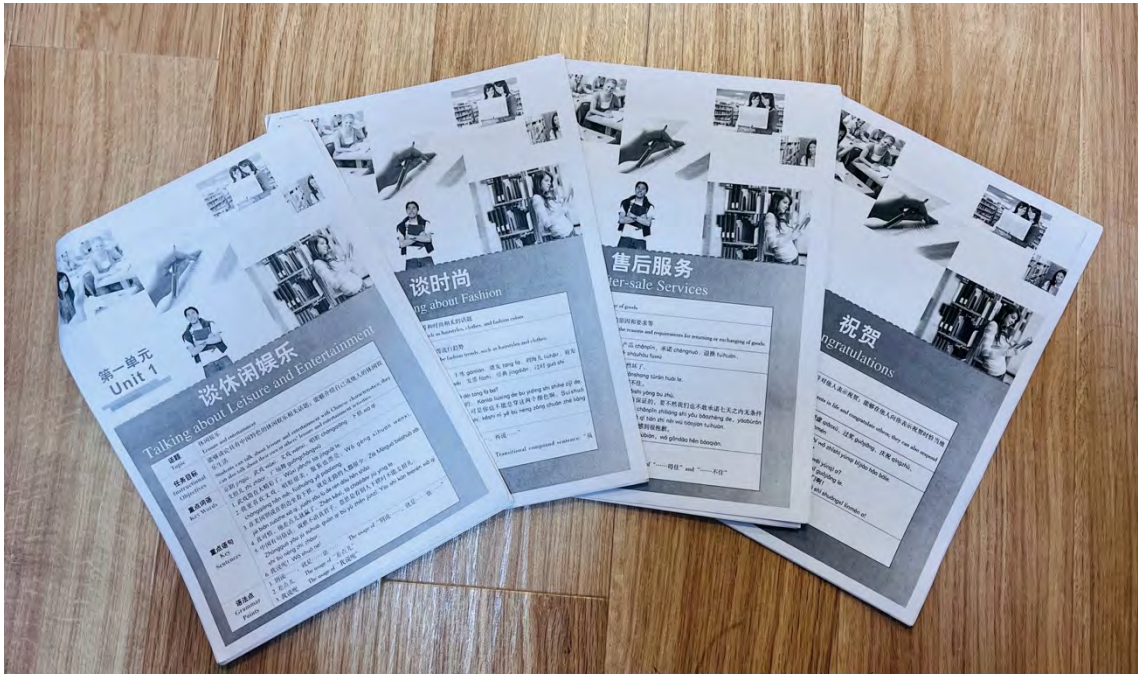
はじめはオール中国語の授業についていけるかととても不安でしたが、汪老师は頻繁に、私たちがちゃんと理解できているかを確かめてくれ、理解が不十分な単語や文章があるときにはためらわずに質問できる雰囲気がありました。いつも私たちが納得できるまで丁寧に説明してくださったので、授業内容をしっかりと吸収することができました。

授業中は、新出単語や教材本文についての解説があるほか、ペアやグループを作って会話の練習をする時間も多く取られていました。また、全員が簡単な個人発表をする機会も2回ほどあり、写真やスライドを使って5分程度の発表を行いました。発表後の質疑応答では同級生や先生が質問をしてくれるのですが、そのときには、拙いながらも一生懸命に話した内容がちゃんと伝わっていることを実感できて嬉しかったです。

毎回の授業の冒頭では、前日に行われた活動や訪れた場所などについて先生に質問されたり紹介したりする時間もありました。教材の内容よりもっと身近である事柄や、自分自身の感想などを言葉にするという練習ができ、より日常的な語彙や言い回しを身につけられたと思います。

さらに授業中には、教材の本文に関連して中国の様々な文化を知ることができました。時には教材を飛び出して先生が話をしてくれたり動画を見せてくれたりと、リアルな中国文化に触れることができたのも、とても良かったと思います。

【汉语二】は会話の授業ということで、3週間にわたる全28コマの授業を通して、中国語を聴く力・話す力を集中的に伸ばせたと思います。南京に渡ってすぐの頃は授業中に先生が言っていることが全然わからなかったのですが、帰る頃にはほとんど理解できるようになっており、この短期間での大きな成長に私自身も驚きを覚えています。これはひとえに、授業を担当してくださった汪老师のおかげです。私が南京研修に参加した一番の理由はまさに会話力を高めることだったので、汪老师には大変感謝しています。いつか、今よりもっと流暢な中国語で直接お礼を伝えたいです。



【汉语二】で使用了教材

1-3. 中国文化体験

印藤 直晃

四年ぶりの現地開催となったこのたびの南京研修では、現地の講師による多彩な文化体験課が開講された。それぞれの内容を簡単にまとめ、充実した体験を振り返りたい。

太極拳



太極拳は明末清初に創始された中国拳法の一つで、現在では主に健康増進を目的として世界各地に行われる。今回の講習は、三回の授業で簡化太極拳全 16 式のおよそ半分にわたって手ほどきを受ける濃密なものだった。

ご指導をいただいた楊新華先生は幼少より楊式太極拳を学んだ達人で、授業ではぎこちなく型を真似る我々に絶えず叱声と激励が飛んだ。指導は懇切丁寧で、我々の動きが型を外れる毎に逐一体勢を矯正してくださったが、不慣れな私は体の平衡を保ちかねて転びかけることも度々であった。

興味深いことに、授業においては「実戦」における立ち回り方が度々言及された。前述したように健康法として見られることの多い太極拳だが、もともとは歴とした中国武術であって、戦闘の技術が教授されること自体に不思議はない。だが、学生に向かって敵の動きを演じてみせ、「敵にここを突かれたらひとたまりもない」と的確な助言を受ける楊先生の指導には、我々が太極拳に抱いていた緩慢な体操という先入観を打ち消して余りあるほどの気迫が満ちていた。

そんな楊先生も授業が終わると決まって優しい笑顔になり、三年ぶりに東大の学生と一緒に太極拳ができたことを喜んでくださったのが実に印象深い。和気藹々とした雰囲気

心地良い疲労も相俟って、現地開催の復活がまことに喜ばしく思われたひとときだった。

ちなみに、南京大学構内には多くの運動場が存在し、現地の学生たちが昼夜を問わずスポーツに興じていた。体育会系の研修参加者は暇を見つけては運動場に繰り出していったものだが、日頃スポーツに親しまない私にとっては太極拳の講習が貴重な運動の機会となったことを書き添えておく。

泥人



泥人とは、捏ねて乾かした粘土で人や動物を模った中国の伝統的な玩具である。中国各地に地域色豊かな作り方が伝えられるが、今回の講習では南京当地の様式を学んだ。

江蘇省の無形文化遺産である南京泥人は、デフォルメの効いたシンプルな造形と鮮やかな彩色とを特徴とし、見るにつけ触れるにつけ丸々と可愛らしい。その素朴な見た目に油断して制作難度を見くびっていた我々は、講習開始早々にして挫折の憂き目を見ることとなった。

壇上の朱建東先生の掌中では大小の粘土塊が見る間に水滴状に整えられ、次いで様々な部品へと手際よく練り上げられていくのだが、机上の紫砂泥でこれを再現するのは至難の業であった。我々が単純な球形すら作りあげているのに、粘土の方ではお構いなしに乾きはじめ、ようやく貼り付けた部品も努力の甲斐なく剥がれ落ちてしまう。二時間弱の悪戦苦闘の末に仕上がったのは、お手本の鶏とは似ても似つかない歪な塊だった。

初回の授業で惨敗を喫したとはいえ、敗因が明確であるだけにかえってリベンジへの意欲が湧いた。部品の大さきの配分と粘土に含まれる水分の調節にさえ気を配っていれば、形が多少粗くても後から手直しすることができる。前回の反省を踏まえて注意深く粘土を成形していったのが幸いして、二回目の授業では幾分整った形の泥人を作ることができた。

最終回の授業では仕上げの工程を習った。戦後に長足の発展を遂げた南京泥人の題材や色使いには、しばしば時代の流行や個人の自由な趣向が反映される。そのため彩色にあたって特定の塗り方は指定されず、作例を参考にして思い思いの色を塗ることが許された。元の形がシンプルなので、顔料を乗せていくのは決して難しい作業ではない。暫くして出来上がった学生の作品を並べてみると、極彩色の取り合わせが得も言わず華やかで、同時の経つのも忘れ、矯めつ眇めつしては感嘆するばかりであった。

茶芸体験



中国は喫茶習慣発祥の地であり、今日の中国茶は製法と作法において精緻な発展を遂げている。今回の講習で学んだのはとりわけ優雅な茶芸の作法であり、喫茶文化の精華に直に触れることのできる貴重な体験だった。なお、「茶芸」という言葉から長いヤカンを操る茶芸師の姿を連想された方も居られようが、本来は良質な茶葉を正しくかつ上品に淹れる技術を指すのであって、現代中国では商談の場から友人との歓談に至るまで、公私を問わずあらゆる場面で茶芸が尊ばれている。

教室の中央には大きな会議机が据えられており、学生銘々の席には皿代わりに芭蕉の葉が敷かれていた。講義では中国茶の歴史や種類が詳細に紹介されたが、その合間には旗袍をお召しになった講師の方々が手ずからお茶を淹れてくださり、自席にピッチャーが回ってくると「請用茶」の声掛けとともに隣席の人に注ぐ約束になっていた。

お茶があればお茶請けもあるもので、時折種々の菓子を満載した菓子盆が手から手へ送り渡された。俗に「甜配緑、酸配紅、瓜子配烏龍」というのに違わず、緑茶が出ると豆沙の甘味が、紅茶が入ると山楂の酸味が、烏龍茶が振舞われれば瓜子の香ばしさがそれぞれに好ましく思われた。また、変わり種には雲南特産の玫瑰餅があつて、頬張ると薔薇の香りが鼻腔に満ち、食べた者は皆驚いて目を見交わした。

学生たちを特に喜ばせたのは茶葉のプレゼントである。講義の途中にクイズが出題され、秀逸な回答をした者にはいろいろな茶葉の試供品が贈られた。授業で淹れられた中国茶は大体揃っていて、なかには普洱茶の餅茶や白茶のパックなど、高価で珍しいものも含まれていた。だが、自宅の急須で淹れる中国茶の味は同じようでどこか違う。馥郁たる茶の香に包まれ、離俗の境に遊んだ南京の昼下がりが、今となってはただ懐かしく思い出される。

2. 中国語講演

2-1. 「明代歴史及鄭和七下西洋」江蘇国際文化交流中心・趙志剛教授（8月14日）

松浦 知希

南京サマースクール6日目、私たちは中国の歴史の専門家の方から、明の歴史と鄭和の遠征についてのお話を伺った。

その方によると、近代以降から今日に至るまで、中国は過去の王朝と比べて他国の侵略を受けたように劣る点が多々あり、過去の王朝を目標としてその時代のような繁栄を取り



戻さなければいけない、ということであった。その王朝こそが明朝であり、鄭和による朝貢貿易の拡大に示されるように、中国の覇権が海外へと広がっている時代であった。

しかし、なぜ明朝が最も繁栄したと考えられるのだろうか。それは他の王朝に各々の問題があり、政権が不安定であったためである。以下、順に各王朝の問題を述べる。

中国の歴史を振り返ってみると、秦、漢、唐、宋、明といった有名な王朝がある。

秦（紀元前 221 年～紀元前 201 年）は中国史上初の強大な軍事力を持った帝国であり、秦の始皇帝はしばしば長江のほとりに立って東方を眺め、東方の海に憧れ、徐福を東方航海に派遣したとも言われている。しかし、秦は専制政治を行い、民衆は悲惨な生活を送り、わずか二代で民衆に倒され、滅亡した。したがって、秦は再興の対象にはなりえなかった。

漢王朝（紀元前 202 年～紀元後 220 年）は、秦の次に有名な王朝である。古代中国の文人は、強大な国や豊かな社会を表現するとき、しばしば「遠迈汉唐」と述べたが、これは「漢王朝や唐王朝と同程度に繁栄し、強大な国である」という意味だった。確かに、漢王朝は軍事的にも強大で、社会的にも繁栄し、安定していた時期があった。しかし、漢王朝の皇帝は、他民族匈奴の離反をさけ、懐柔するために王家か後宮から女性を選び匈奴王に嫁がせる「和親」政策をとった。これは唐の時代には「和蕃公主」と呼ばれ、のちの「昭君出塞」の物語につながった。このような歴史は不名誉なものであり、漢王朝を復活させる対象としてはふさわしくないと多くの人が考えている。

唐王朝（618年～907年）は、中国の歴史において非常に強力な王朝であった。唐王朝は、高度に発達した経済と軍事力に加え、外国との交流に積極的であり、非常に繁栄した文化を特徴としていた。これは南京サマースクール期間中に訪れた大雲寺（揚州）に祀られる鑑真が渡日し、正しい仏教を教えるために活動したことなどに表れている。この時代には、日本の中国大使をはじめ、多くの外国商人や使節が文化交流のために中国を訪れたのである。しかし、唐は強力な軍隊を持ち、何度も対外戦争を起こしたため、平和な時代は長続きせず、黄巢の乱以後衰退していった。

宋王朝（960年～1279年）は中国史上、文化・芸術の面で最も繁栄した時代であり、宋の皇帝の多くは優れた書家、詩人、画家であった。宋は民間の商業や貿易において繁栄を極め、中国の帆船時代の始まりを飾った。しかし、宋は軍事力が弱く、国を守ることができなかった。遼や西夏といった北方の他民族からの侵略に直面した宋は、「岁币」、つまり平和と安全と引き換えに毎年敵に金銭・物品を支払うという政策を採用した。しかし、この政策は宋とその国民を守ることに繋がらなかった。その後、宋の首都は占領され、徽宗など2人の皇帝は侵略してきた敵の捕虜となり、敵国に連れ戻されて屈辱を受け、投獄された。中国の歴史では、この出来事は「靖康耻」として知られている。中国人の心の中には、歴史の中で2つの大きな恥辱があり、ひとつは近代以降多くの国に侵略された歴史であり、もうひとつがこの宋の「靖康耻」である。

一方、明朝（1368～1644年）には上記のような欠点はなかった。明朝は社会的に安定し、経済的にも繁栄しており、外敵に直面しても「和親」や「岁币」の政策を採らず、代わりに“天子御国门，君王死社稷”という政策を採った。皇帝は自ら国境地帯に住み、自ら国を守ろうとした。明の建国者である永楽帝は、都を北京に移し、自ら軍を率いて敵を防いだ。明の最後の皇帝である崇禎帝は、北京を占領した敵を前にして降伏せず、自害した。以上より、明朝は中国人が目指すべき最も気概（気節）のある時代と言える。

明の200年の歴史の中で最も繁栄し、傑出した時期は、鄭和が西域に渡った30年間（1405-1433年）である。この時代、中国は非常に強大で巨大な艦隊を持っていたにもかかわらず、外国を侵略することなく、平和的に外交を行い、近隣諸国と友好関係を築いた。「天下共享太平之福」、つまり、全世界が共に平和で幸福な生活を享受することを目指した。したがって、いわゆる中華民族の偉大な繁栄は、鄭和が西域に渡った当時の中国を目指すべきである、ということになる。

それでは、鄭和の遠征はどういったものだったのだろうか。専門家の方によると、鄭和の遠征の出発点は南京にあり、まず南京の話をする必要がある。

南京には非常に多くの史跡や古い建物がある。都市のあり方を見るには、まず城壁を見る必要がある。南京市を囲むように作られた城壁は600年以上の歴史があり、その間に幾多の戦禍をくぐり抜けてきた。しかし、現在もその姿を保っているのは、多くの王朝の都として、城壁が良い材料で作られ、高い技術で築かれているからである。さらに、南京では、明の故宮跡や明の小陵を見たり、長江を見に行くこともできる。長江は昔、今日より

も川幅が広がった。北方では中国人は万里の長城を築いて侵略から身を守ったが、長江の方が万里の長城よりもはるかに防衛力が強かったとされる。

南京には、清朝末期の著名人、魏元の旧居もある。魏源は啓蒙的な知識人で、彼は清朝が率先して門戸を開き、世界を学ぶべきだと提唱した。「海国図志」という本を書き、西洋諸国の状況や歴史、先進技術を紹介し、中国国民に世界に目を向けるよう訴えようとした。しかし、当時の中国では誰も彼の言葉に耳を傾けなかった。十数年後、この本は日本に届き、明治天皇の手に渡った。明治天皇はこの本に大きな影響を受け、その後、明治維新を成し遂げ、日本を先進国、強国へと変えていった。

それでは、鄭和の遠征について、この航海の目的は何だったのだろうか。

鄭和の艦隊の通訳者である馬歡の著書『韻雅盛衰』によると、西洋に行く目的は2つあったことがわかる。1つ目は「道德化」、つまり文化や教化を広めること。2つ目は他国との交易、すなわち朝貢貿易を広めることである。

では、鄭和は実際にどの国まで航海を行なったのだろうか。史料によると、航海の最大範囲はアフリカ東岸、紅海とペルシャ湾、アフリカ大陸、インドシナ諸島と現在では歴史家の間で認識されている。しかし、歴史上、政治的な理由から、鄭和の日記と関連する航海記録が大規模に破棄されたことがある。そのため、今日、鄭和の西域航海の歴史をたどることは難しい。鄭和の航海の範囲については、依然として多くの疑問点が残る。マウロの世界地図（1459年）には、喜望峰を回り、未開の海域を航行する数隻の中国の帆船が描かれている。アメリカ大陸の東海岸で大量のソテツが発見されただけでなく、当時原住民には作ることが不可能だった鉄の錨が発見された。さらにマゼランのような西洋の航海士は地図を持って航海したが、誰がその地図を描いたのだろうか。このような事実から、専門家の方は鄭和の航海の範囲はもっと広いはずだと考えているが、その裏付けのためにさらなる研究が必要であると考えていた。

このように、未だ謎の多い鄭和の航海であるが、この航海を実現させたのは明朝の安定と繁栄である。そして、明朝の首都が約60年間、南京におかれたことで、南京は繁栄を極め、その時代の遺跡・記録が今日に至るまで数多く残っている。次はこの南京の地で体験した出来事について記す。

2-2. 「中国経済」 南京大学海外教育学院・陳志紅副教授 (8月28日)

飯田 奈那

【ご講演の内容】

経済に関する講演は生徒の質問に順番に先生が答えてくださる形式で進みました。参加した生徒の中には経済学部に進学する者や経済に興味のある者が多く、質問が多く出ました。質問は中国の産業構造から経済政策、科学との関連まで多岐にわたりました。

先生は近年の中国経済の課題として供給過多と発展の相対的遅れの2つを挙げてくださいました。

供給過多に対する中国の政策の1つめは供給側改革です。需要と供給のうち供給の側を改革しようという政策のことです。供給側改革以前の経済政策は、輸出や投資など需要面に注目するものがほとんどでした。対して供給側改革では、経済成長率の上げ止まりや人口減少による労働力減少に対応し経済を活性化するために農村部の人材の活用、供給過多になった分野の人員削減、テクノロジーの利用など効率的に生産を行うための政策が推し進められています。

2つめの制作は双循環です。国際貿易と投資に開かれたままでありながら、国内消費を優先することによって国の経済を再構築するための中国政府のコロナ禍後の新しい戦略です。

下図(出典: 供应国际) は双循環を図で表したものです。国内の経済活動を指す「内循環」と中国と外部世界との経済連携を指す「外循環」の2つからなる構造です。まず国内に対しては、コロナ禍によって落ち込んだ消費の拡大を働きかけ(拉动内需)、内循環を加速させます。また、海外からは原料などの輸入を拡大し、生産したものを輸出することで外循環を加速させます。

2つ目の課題であった発展の相対的遅れに関する説明は、「増長」と「发展」という2つの語の意味の違いから始まりました。対して中国経済でいう「増長」は、指標上の経済成長や国民の所得の増加をさします。「发展」は物の質のレベルの向上や社会問題の解決をさします。中国は改革開放を通じて「増長」を得ることはできましたが、「发展」面では課題が残っているというのが現状です。例えば、商品の品質の問題、戸籍制度によって発生する農村部と都会の格差などです。農村部の中には医療保険の整備が遅れた地域もありました。関連して印象に残っているのは、先生がご紹介くださった「经济」の文字の意味です。「经」は「经营」、つまり経営活動を表すと考えられます。そして「济」は「救济」、つまり不利益を被っている人々を援助することを表すといえます。「济」の字こそが経営活動を通して世の中をよりよくしようという精神、つまり社会主義を表しています。社会主義の下では「増長」と「发展」の両方がバランスを保ちながら実現される状態を目指すこととなります。現状を改善するために、中国はこれからもさまざまな政策を実施していくと考えられます。

最後に中国の経済政策の変遷について先生がご紹介くださいました。中国は「其实求是」、つまりその時々にあった政策をそれぞれ選んでいくという方針に基づきさまざまな政策を

打ち出しています。例としては経済圏を構築する一帯一路、インターネットを産業に生かす互联网+ 戦略、人材派遣やピンポイント支援などを行う脱貧攻堅があげられます。

中国の経済に対して興味が深まった授業となりました。

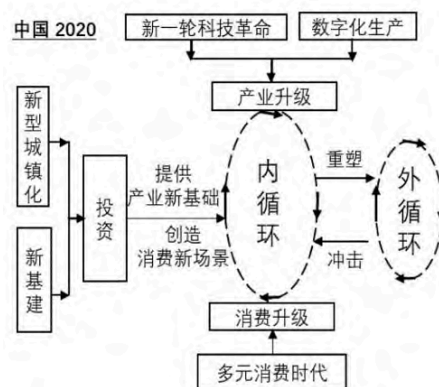
【ご講演に対する個人の感想】

ご講演でお聞きしたことを滞在期間中に見聞きしたものと照らし合わせると、納得することが多かったです。

例えば、中国では格差が目に見える形で存在するという点についてです。新街口などの栄えている地域では高額な汉服やハイブランド、車などがデパートで売られているのを目にしました。一方で観光地では開発やインフラが完全でない場所や、2元(約40円)のアイスのみを売っている方が目立った場所がありました。同様に農村部と都市部の違いもはっきりしたものであることが想像できました。

また、ご講演の最後にご紹介いただいた政策が実際に実行に移されている例を多く目にしました。私たちがプログラム中授業を受けていた教室の隣ではアフリカからいらっしやった留学生の方々が授業を受けており、一帯一路がここでも行われているのだと感じました。また、中国ではインターネットの利用が極めて進んでおり、自動販売機の商品や洗濯機の利用、カフェでのオーダー、映画のチケットなどインターネットまたは WeChat のミニプログラムを利用してしか購入できないものが多くありました。そして実際にインターネットでの購入に限定することで産業側にメリットもありました。映画のチケットが全てインターネット上での購入であることで利用者は映画ごとに観た人の数がはっきりとわかりますし、洗濯機は洗い終わった時に通知が来るようになっているため洗濯機を効率的に利用することができ回転率が上がります。具体的な例を見ることで中国経済についての理解が深まりました。

ご講演に関して中国語の面においては、比較的内容を聞き取りやすかったです。ご講演がプログラムの終盤に行われたこともあり、プログラム内での自身の中国語力の向上を感じることができました(先生もわかりやすくお話してくださいました)。ですがご講演全体の構造や論理の構造などを自力で把握するのは自分にとっては難しかったです。余裕を持って思考しながら聞き取りを行うほどのレベルに自分が達していないのだと感じました。プログラム後も中国語を聞き流すなどして耳を鍛えていこうと思います。



上図: 双循环 の概念図(出典: 供应国际)

3. 現地での交流

3-1. 田家炳高中の高校生と南京大学学生との交流

田中 渚

南京サマースクール期間中、田家炳高校日本語クラスの生徒と1回、そして南京大学の学生と2回、合計3回現地学生と交流する機会を設けていただきました。

① 8/18 南京大学の学生との交流（第1回）

まず、全員教室に集まってグループ分け（東大生、南大生それぞれ2、3人ずつ）をし、それぞれのグループで集まって自己紹介と行先決めをしました。今回は新街口に行くグループがほとんどで、私たちのグループも新街口に行きました。まず、駅の近くのおしゃれなカフェみたいなところに行こうとしたのですが、なんと満席で入れず…そこで、デパートの地下にある茉沏（More cheers）というミルクティーのお店でドリンクを買うことになりました。私は金木犀のタピオカミルクティーを注文しました。中国では金木犀の花は様々な伝統的スイーツに使われていますが、日本ではあまり馴染みがないため、新鮮な感覚でしたが、とても美味しく、また買ってみたいと思いました。その後は、新街口のデパート内をぶらぶらしました。新街口には何個もデパートがありますが、それぞれに特徴があって面白かったです。例えば、德基广场というデパートはとても高級志向なところで、内装は銀座のデパートみたいな感じで3階ぐらいまでひたすら高級ブランド店が立ち並んでいたため、普段そのような場所にあまり縁がない私はとても圧倒されました（笑）。南大の学生さんたちと話した中で、皆さんが驚いていたのは日本の大学生はほぼ全員バイトをしているということでした。中国の大学生は勉強が忙しくてバイトどころではないようです。日本と中国では世間的な大学の位置付けが異なるということはあると思いますが、私も彼らの意識の高さを見習っていきたいと思いました。



写真1 グループの皆さんと（南京大学1）

② 8/21 田家炳高級中学日本語クラスの生徒との交流

田家炳高級中学は南京屈指の名門校で、多数の卒業生を中国の名門大学へ輩出しているほか、日本の大学に進学したい生徒のクラスを設けており、毎年多くの卒業生が日本の大学を受験し、進学しています。今回は、その日本語クラスの生徒と交流させていただきました。皆さん夏休みなのに補習の授業があるらしく、忙しいにもかかわらず参加してくださって本当にありがたかったです。まず、両校の先生方による挨拶があった後、生徒・学生による両校それぞれの学校紹介がありました（原稿作成の時間が取れなかった中、ほぼアドリブで喋ってくれた井木同学には本当に感謝です）。その後、両校から出し物の発表がありました。田家炳からは□さんがバイオリンで千本桜を演奏してくれました。東大からは、高校生に4-5人組に分かれてもらい、それぞれのチームに東大生1人がついてチーム対抗で日本にまつわるクイズ大会をしました。クイズの内容は日本語の単語、伝統文化、アニメなどさまざまでしたが、高校生の皆さんはこちらの想定を上回る知識を持っていて、彼らの日本への関心の高さを実感しました。その後、先ほどとは別のグループに分かれておしゃべりをしました。私のグループの生徒はとても日本生活への関心が高く、大学生活や入試制度などについてたくさん質問してくれました。一番驚いたのは、彼らの日本語能力の高さです。みんな高校に入ってから日本語の学習を始めているので、学習歴は長い人で2年間ぐらいなのですが、私の中国語よりもよっぽどボキャブラリーも多く、聴き取りもできていました。聞くと、日本語の授業が週にかなりの量（具体的な時間は忘れてしまいましたが私たちの1年Sセメの時よりも断然多かった）あるらしく、自然とある程度は話せるようになるとのことでした。最後に、教室を出て彼らに校内を案内してもらいました。校内には実家が遠方にある生徒が暮らす寮や、バスケットコート、体育館、カフェなど様々な施設が充実していました。個人的に羨ましかったのは、外に卓球台が何台か置いてあったことです。これなら休み時間とかに気軽に使えそうで、もし私がこの生徒だったら毎日卓球しているな、と思いました。生徒の皆さんはとても明るく、たくさん喋ってくれて、本当に楽しいひとときを過ごすことができました。



写真2 おしゃべりグループの皆さんと（田家炳高中）

③ 8/25 南京大学の学生との交流（第2回）

今回も東大生3人、南大生3人のグループに分かれ、まず教室で自己紹介と行先決めをした後、それぞれの目的地に向かいました。3班中私の班を含む2班が紅山動物園、あとの1班は鶏鳴寺に行きました。私たちが行った紅山動物園は、とても広い敷地の中に多種多様な動物が飼育されています。中でも目玉はパンダで、私は今まで一度も生で見たことがなかったのでとても感動しました（もっとも暑さからかみんなグダッとしていましたが）。他にもコアラや熱帯鳥、トラなどを間近で見ることができて、短い時間でしたが非常に満足でした。ただ、敷地が広すぎて、しかもアップダウンがかなりある道をずっと歩いていたのでかなり疲れました（笑）今回は南大の皆さんが動物園のチケット代を払ってくださったり、パンダのグッズを買ってくれたりして、大変申し訳なく思うと同時に中国の方々の気前の良さを改めて感じました。

南京サマースクールでの交流活動全体を通して、南京の様々なスポットを楽しむことができたのはもちろんですが、現地の若い人たちと会話することで、中国の若者の日本観や、お互いの価値観の違いなどを肌で感じることができ、本当に良い経験になりました。また、学生の皆さんは交流活動に参加しているだけあって学業への意識がとても高く、大変刺激になりました。参加してくれた学生の皆さん、そしてこの機会を用意してくださった先生方に感謝したいです。惜しむらくは、私のWeChatアカウントが早くも2日目にして使えなくなってしまう、学生の皆さんと連絡先を交換できなかったことです。本当にいい人ばかりで、もっといろいろなことを話したかったので、とても残念でした…



写真 1 グループの皆さんと（南京大学2）

3-2. 江蘇蘇美達五金工具有限公司での見学

木村 眞子

8月22日（火）

バスで1時間ほどかけて、南京市江北新区にある「江苏苏美达五金工具有限公司」の見学に行った。建物の前に広がる芝生と、その上で動いていた小型の機械に興味を引かれつつ中に入り、皆で写真撮影をした後、会社の方に日本語で建物内を案内していただいた。

まず、会社の沿革について説明を受けた。五金工具有限公司は、国有の中国機械工業グループ（国機グループ）に所属している苏美达（Sumec）グループの子会社で、農業用機械や園芸用機械、電動工具などが主力商品である。独自の研究開発拠点を持っていることが特徴であり、CNAS（中国合格評定国家認可委員会）の認可を受けて、“国家工程研究中心”（国家地方連合工程研究開発センター）、“国家级工业设计中心”（国家级工業設計センター）、“国家级博士后科研工作站”（国家级ポストドクター科学研究ワークステーション）（日本語訳は会社のホームページより引用）などの拠点を設置している。この会社は、2021年にはグループの子会社の中で売り上げトップを記録したとのことだった。

次に、研究開発中だという、屋根に設置された太陽光パネルを掃除する機械や、太陽光発電で余った電力を貯蔵する機械を見せていただいた。その後、ショールームに案内され、会社の商品の一つずつ紹介していただいた。以下にその概要を記録する。

- ・電動ドライバー：一つのバッテリーを様々な種類のドライバーに入れて使うことができる。ドライバーに合わせてバッテリーの種類を変える必要がないため便利である。
- ・フォームミルク製造機：大きなコップの形になっていて、牛乳を入れるとフォームミルクを作ることができる。
- ・バックミラー：見た目は通常のバックミラーだが、ドライブレコーダーが搭載されている。
- ・ポータブル電源：折りたたむと B5 ノートくらいのサイズ・薄さになり、カバンに入れて充電することができる。
- ・草刈りロボット：GPS 機能を使ってミリ単位で位置を調節し、全自動で草を刈ることができる。
- ・高圧洗浄機：欧米向けには大型の機械、日本向けには家庭用の小型の機械を多く輸出している。
- ・園芸用機械：G force というプロ向けのブランドと、Yard force という家庭用のブランドの商品を生産している（写真 1）。これらは日本のブランドで、この会社では元々日本の会社の商品を自社の工場で作っていたが、現在は自社ブランドも持っているということだった。

ショールームに向かう通路の途中には、動画配信のための部屋があった（写真 2）。この部屋で Ticktock の動画を生配信しているようだ。また、この会社は環境保護にも力を入れているとも伺った。グループの中で初めてカーボンニュートラルを実現したそうで、通路

の壁には脱炭素の認定状や賞状がいくつも飾られていた（写真3）。また、二酸化炭素排出削減のため、動力をガソリンではなくリチウムイオンバッテリーに変え、リチウムイオンバッテリーでもガソリンと同等の動力を供給できるように、研究開発を進めたということだった。

最後に、実験室を見学した。開発した機械の耐久性や耐水性をテストしたり、バッテリーが爆発しないか、輸送中の船の揺れに耐えられるか、機械が石を巻き込んで進んでも石が人に当たらないか、といった安全性を確認したりしているそうだ。実際に、室内で社員の方が作業している様子が見られた。高圧洗浄機を使った洗車作業も体験させていただいた（写真4）。

30分ほどの見学を終えて入り口に戻る途中、芝生で草刈りロボットが稼働する中、隅の方で男性が草を刈っているのが見えた（写真5）。隅まで丁寧に行う作業には、草刈りロボットよりも人間の方が向いているのかもしれない。また、芝生に「小鳥が歌っているので邪魔をしないでください」という内容の標識が立っていたのも印象的だった（写真6）。

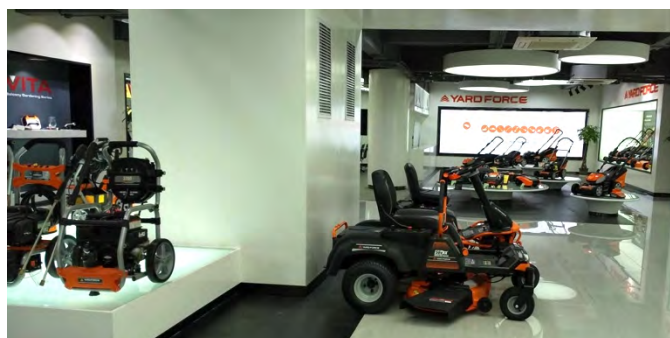


写真1



写真2



写真3

写真 4



写真 6

写真 5



見学の様



建物の外

4. 参観・観光

4-1. 中山陵・南京博物院

韓 美嘉

広大な中国大陸の華東地方にある江蘇省の南西部に位置するのが、この夏私たちが三週間のサマースクールで赴いた南京市だ。かつて数々の王朝の都として栄え、中華民国時代には首都として公に認められていた経歴を有する、中国の最も重要な都市の一つだ。そんな濃厚な歴史色を帯びる南京のことを少しでも深く知るため、大学側は南京内にある二つの重要スポットを見学する機会を私たちに与えた。その一つは、清の打倒を掲げ、今でも「革命の父」として歴史に名を刻んでいる孫中山（孫文）が眠る中山陵であり、もう一つは中国で最初に国家投資で建設された大型総合博物館である南京博物院である。

中山陵の見学を振り返ってみて真っ先に脳裏に浮かぶのは、やはり墓道の 392 段にもわたる階段と、それを登り切ったものにはしか見られない頂上からの壮大な眺めである。墓道の階段の 392 という段数は、単に設計上の都合で決まったものではなく、当時の中国の人口である 3 億 9 千 2 百万人に因っているとされている。ここからも、孫中山は亡くなった後もなお中国の人民と共に在る偉大な存在なのだなどと感慨深く思わずにはいられない。紫金山の頂上まで長く続く階段を前にして、階段を普段から登り慣れている私は案外いけるだろうと高を括っていたものの、200 段ほど登ったところで当初の一息で登るという目標を諦めざるを得なくなった。来訪者が多く、衛生上マスクを着用していたこともあって呼吸が少し苦しかったのもあったが、何よりも脚の疲労感が凄まじく、結局途中で休みを挟みながらなんとか階段を登り切ることができた。相当疲弊しながらも、ふと登ってきた方を振り返ってみると、広大な中山陵の敷地に始まり、彼方にある南京市内の景色に至るまでの雄大な眺めが一望でき、すっかり疲れも感じなくなるほどに圧倒された。紫金山の頂上には祭堂が建っており、その奥に孫中山の墓室がある。中は中華民国時代の名残を感じさせる装飾と設計が施されており、一步中へと踏み入ると、炎天下の屋外から一変してほのかに涼しげな空気の流れを感じる、厳かな空間が広がっていた。

付近の散策が終わると、私たちは再び階段の麓まで戻り、先に階段の途中で撮っていた写真を受け取りに向かった。実はこの記念写真は無料で撮影してもらうことができ、中山陵を訪れた者へのサービスの一つとして訪問者からの人気を博している。写真を受け取ると、同じく無料でもらえる透明なキーホルダーの中に収め、自分だけの中山陵限定キーホルダーが出来上がる。キーホルダーの中の記念写真をまじまじと眺めていると、同行してくださっていたアシスタントティーチャー（AT）の方と南京大学の杭先生が、私たちが暑さと疲労で熱中症などに罹るのを心配して皆に飲み薬を提供してくださった。それらは藿香（カッ香）正气水と呼ばれるもので、カッ香、陳皮、白朮などの成分が配合されている。気になるお味はというと、とてつもない苦味、そして何よりも飲んだ後の喉から胸部に至るまでの強烈な刺激が特徴的な、なかなか独特な風味の薬だ。とはいえ、正に“良薬苦口（良薬は口に苦し）”、服用後は疲労感や火照りも多少改善したようで、皆も元気がみなぎったようだった。

中山陵に赴いてみて感じたのは、やはり中国の景点と呼ばれる観光名所はもれなく規模が大きく、人々を圧倒させるような壮大さを誇っているということ、そして特に中山陵の

ようなスポットは、その背景にある悠久の歴史が有する特有のオーラを感じさせるということだ。こういった壮大さや特有のオーラこそが歴史景点の荘厳さを放つと同時に、世界中の人々を魅了してやまないエッセンスになっているのかもしれないと考えさせられた。

その後訪れた南京博物院の方でも、その立派な佇まいと背後に流れる正しい由緒から起因する壮麗さと気品に私たちはたちまち魅了された。折悪く大好評の民国館は工事のようなものを行なっていたため参観することはできなかったものの、夥しい数の重要展示物を目にすることができ、とても満足している。南京博物院のコレクションの中でも特に歴史的・文化的意義が甚大なものとして、銀缕玉衣や西汉金兽などが挙げられ、他にも唐三彩や著名人による歴代の絵画や有名書家たちの作品の数々も多岐にわたって展示されている。

雨天だったこともあってか、博物院の中は人でいっぱいになっており、展示ホールの中は言うまでもなかった。これが“人山人海”か、と思わず唸ったものの、あまりにも参観者が多かったため必ずしもお目当ての展示品をじっくり鑑賞する暇はなく、その点がいささか残念ではあった。とはいってもおおむね展示館を見て回ることはでき、かなり充実した体験になったと思う。室内とはいえ皆歩き回って憔悴したのか、帰りのバスの中ではヘトヘトになってぐっすり眠る姿も見受けられた。それほど南京博物院の中は非常に豊富で、本来ならば1日かけてもしっかり見終わらないほどに膨大な収蔵品を誇っている。

今回の南京サマースクールでは、中国の歴史と文化が濃厚に融合した二つの重要名所を訪れる機会に恵まれて本当に幸運だったと思う。オンラインでもまた違った独自の体験ができるかもしれないが、やはり異文化理解において、その文化のホットスポットに自らの足で赴き、自らの五感をフル起動して全身でその地の文化と歴史を浴びることが一番の方法なのだと再確認することができた。今回は取り上げなかったが、普段の南京大学での中国語授業で学びを深めた経験、教員・学生の皆さんとの交流に興じた経験、本場のグルメに舌鼓を打った経験、南京市内の随所でみんなと写真をとった経験、中国の交通に次第に慣れていった経験、これら全てが今や私にとっての忘れがたい思い出になっている。また、この度の交流プロジェクトに尽力してくださった南京大学並びに東京大学の関係者の皆様に心からお礼を申し上げたいと思う。そして、今回ともにプロジェクトに参加し、ともに友情の絆を深めた同学の皆にも深く感謝したい。皆がいてくれたからこそ、開始前に抱いていた一抹の不安が、即座にこれから始まる日々への期待に変わったといっても過言ではない。最後に、文化背景の異なる私たち東京大学の学生たちを暖かく迎え入れてくれた南京の地に感謝したい。谢谢你，南京！



図 1 : 中山陵の階段の上からの眺め



図 2 : 南京博物院の収蔵品の一つ「西汉金兽」

4-2. 揚州旅行

並木 勇輝

南京サマースクール開始から約二週間半経ち、三度目の週末を迎えた。現地での生活にはほぼ慣れていたが、平日午前授業、午後のプログラムとその準備などで溜まっていた疲労のせいだろうか、体調が優れず元気のないメンバーが出てしまっていた。8月26日の土曜日は終日自由時間だったが、翌日8月27日が揚州旅行だったため丸一日自室で休むメンバーもいて、僕も仙林のキャンパスとその周辺の観光地の見学を予定していたが、疲労回復のため出発時刻を少し遅らせた。

翌日朝8時にマイクロバスに乗り込み、金銀街を出発した。最初の目的地の大明寺まではおよそ1時間半かかるということだったので、皆おのおの外の景色を見たり、おしゃべりをしたり、眠りについたりしていた。出発してからしばらくは二週間経って見慣れた南京市鼓楼区・玄武区の都市の中を走っていったが、30分も経たないうちに南京市郊外の仙林のあたりに差し掛かった。一部、幹線道路に並行して高速鉄道の線路が建設されていた箇所があったのだが、運よく列車が並走して少しの間走行しているところを見ることができた。白い車体に青いラインが引かれた「和諧号」という車両のようだった。総延長は日本の新幹線の約10倍にもかかわらず、現在も新しい路線が建設中であり発展し続けている高速鉄道を実際に目で見ることは出来たのは幸運だったと思う。また少しすると、昨日仙林キャンパスを見学した後に訪れた棲霞寺を右手に見て、南京長江第四大橋を渡り始めた。橋のもとには橋の名前とともに第5代国家主席の江沢民の名が刻まれた看板が立っていて、揚州出身であり南京中央大学に入学した経歴も持つ江沢民の「地元での影響力」を体感することができた。実際、南京長江第四大橋だけでなく、企業訪問の際に通った南京長江トンネルにも江沢民の名が入った看板が立っていたらしい。長江を渡ると、先ほどとは打って変わって一気に田舎の風景になり、やはり広い長江によって隔てられると街の発展具合も両岸で大きな差ができるのかと感じた。そこからしばらくの間は景色もあまり変わらず手持ち無沙汰だったので、携帯で地図を見てあとどれくらいで着くか考えていた。南京市と揚州市の境に看板などは何も建てられておらず、地図を見て初めて揚州市に入ったことに気付いた。揚州は僕の母の出身地であり、帰省で何度か訪れたことがあるが、最後に訪れたのは新型コロナウイルスの蔓延前で約4年ぶりに来ることになる。4年間で揚州はどのように変化しているのか、町並みは変わっているだろうか、などいろいろな想像を膨らませていると、バスは揚州市街地の入り口ともいえる蒋王料金所を通過し、都市郊外でよく見られる高層マンション群を横目に、随分と新しくきれいに舗装された高架の道を進んでいった。高架を降りるとまたトンネルに入り、一気に揚州の中心部に近づいた。しかし、車通りは南京と比べると少なく、比較的静かな印象だった。目的地の大明寺に近くにつれて「蜀岡」と名のついた公園をいくつか見かけた。どうやら大明寺あたりの昔の地名が「蜀岡」というらしい。大明寺の入り口でバスを降り、現地のガイドさんと合流して入場口まで向かった。入場して少し歩みを進めると塔が見えてきた。棲霊塔といって、843年に焼失したが1996年に再建され9階建て高さ約70mと、周りに高い建物がない大明寺で最も目立つ建物だ。李白や白居易といった詩人がかつてこの塔に登り景色を楽しんで、詩を残したらしい。まずはガイドさんについていき、建物を回っていくことになった。

最初に鑑真記念館に入り、奈良の唐招提寺にある鑑真像のレプリカを見ることができた。隣には唐招提寺を描いた絵画、そして鑑真が日本に渡った際に乗った船の模型が展示されており、入口には唐招提寺から大明寺に贈られた灯籠が置かれていて、唐招提寺にあるものと対になっているようだ。1980年代から中の明かりは消えることなく灯り続けていて、日中の友好関係がその明かりのように永遠に続くことを象徴しているとガイドさんから解説を受けた。ちょうどALPS処理水の海洋放出を巡って日中関係が冷え込んでしまったときだったので、この灯籠の明かりに関係改善のお祈りをしておいた。次に訪れた第五泉という泉は、ある状元がその泉の水質が全国5番目だと記したことから名前がついていて、そこで揚州の泉と大明寺のあたりの古い地名「蜀岡」の由来の関係について次のように解説された。揚州には高い山が全くなく、最高峰は大明寺のあたりの標高28mの小さい丘だった。遠く離れた四川の峨眉山で、ある僧が行脚中にのどが渇き、溪谷に降りて柄杓で水を汲んでいたところ、誤って柄杓を溪流に流してしまった。後年その僧が縁あって大明寺を訪れた際、境内の泉からなくした柄杓を取り戻すことができた。人々は揚州の最高峰であるこの山と四川の山はつながっていると考え、蜀の国の「蜀」という字を用い「蜀岡」と名付けたという。この解説を聞いて先ほどバスの中で何度か目にした「蜀岡」の地名について合点がいった。次に欧陽脩が揚州の長官だった際に建てられた平山堂を見学した。名前の由来は長江対岸の鎮江の山々と標高が近く、晴れの日には長江の向こうに山を望むことができたことで、欧陽脩はよく地元の人々を誘い平山堂で宴を開き、撃鼓伝花という遊びで負けたものに酒を飲ませ、詩を読ませたという言い伝えがあるなど、面白い解説を聞くことができた。ガイドさんによる充実した案内の後、30分ほど自由時間が与えられたので、まず棲霊塔に向かった。上るのに13元のチケットを購入するのだが、南京の寺院ではお賽銭すらバーコード決済が利用できたのに対し、現金のみの対応だったので逆に驚いた。エレベーターに乗り7階まで上がると展望台があり、揚州の景色を一望できた。近くにある瘦西湖の景色はもちろん、起伏が少ない地形に加え高い建物がないので非常に遠くまで見渡せ、日本では見ることでできない眺望だった。上の階には仏像があり多くの観光客が並んで待っていたが、時間の都合上並ばずに他の場所を回ることにした。一通り境内を散策した後、また棲霊塔の下に集合し昼食会場に向かった。バスで数分かけて「奥縁酒店」というレストランに到着し、階段を上ると個室に大きな円卓があり、皆で円卓を囲んで淮揚料理を頂いた。料理は比較的食べやすくおいしく頂くことができた。またマントウがたくさん提供されたので、マントウ好きのメンバーと白米代わりに平らげた。昼食を終え、次は大運河博物館に向かった。大運河博物館の辺りは以前帰省した際に通ったことがあり、何もない更地という印象だったが、到着するときれいに整備された広場に巨大な建物が建っていて、以前との変わりように非常に驚いた。夏休みということもあって入り口には長蛇の列ができていたが、事前に予約をしてあったおかげかすぐに中に入ることができた。まず最初に解説端末が配られ、そこから自由に見学することになった。館内には大運河の歴史、江蘇省で出土した遺物、昔の揚州の風景や船を模した展示などさまざまなものがあり、全て回りきるには少し時間が足りなかった。博物館出口にて集合後、揚州旅行最後の目的地である東関街に向かった。東関街は清代の揚州を再現した街並みで、東側の入り口には揚州で地方役人を務めたことがあるマルコ・ポーロの像と、特徴的で目を引くかつての城門である東門が建っている。東関街にも個人的に何度か来たことがあり、その時は観光地の割には静かな雰囲気、三把刀(包丁、髪切り用のはさみ、修脚用の刃物)、扇子、陶器、漆器など伝統工芸品の店舗が並び、ゆっくりと買い物を楽しめる場所という印象だっ

た。しかし、今回訪れると東関街は様変わりしていた。東門から入ってすぐに大きな字が書かれた写真撮影スポットが目に入った。明らかに4,5年前にはなかったものだ。さらに中に入っていく、歩きながら両脇の店を見ていくと、紅茶専門店が数十メートルごとにできていたり、軽食を売る屋台のあった場所にオーソドックスな観光地の土産物を売る店ができていたり、プリクラ機が設置されていたりと、以前とは全く雰囲気が変わっていた。また、歩いて数分すると人の数が以前と比べかなり増えていることに気付いた。地元住民が電動バイクに乗って時折歩行者を追い越していくという光景が以前見られたが、今回の訪問で電動バイクはほとんど見られず、たまに人混みの中をクラクションを鳴らしながらゆっくりと進んでいくのが見られるくらいだった。これらの光景に少し既視感を抱いたのだが、今思うと原宿に似た雰囲気だったと思う。ネット上で人気が出て、昔の静かな街並みから今風のおしゃれな街並みに変わっていったのではないかと個人的に考えた。僕は以前食べておいしかった牛串のお店をなんとか見つけて、食べ歩きをしながら来た道に戻った。東関街を回り終わると、ここまでついてきてくださったガイドの方と別れを告げ、バスに乗り南京大学に戻った。現在の揚州の状況を実際に体感できて、非常に充実した旅行になったと感じた。帰りのバスでは二日後に迫る中国語ショーの準備をしたり、一日の疲れを眠って癒したりしていた。大学に到着した後は、男子5人で数日前に見つけたリーズナブルなワンタンのお店で遅めの夕食を取り、自室に戻った。

ここで、今回の南京サマースクールへの振り返りをしようと思う。南京サマースクールへの参加は自身の中国語能力の向上に言うまでもなく大きな貢献をしたと思う。日本で講義を受け、自学するだけではやはり能力が上がりづらいので、実際に現地に赴いて、生きた中国語を耳にし、自分からも中国語で発信をするという経験は非常に貴重なものだと感じた。また、現地で生活をしていく中で文化・習慣についての知見を深められたのも非常に大きいと考えている。これらと同等の効果を昨年までのようなオンラインの環境でも得るというのは非常に難しいのではないかと思うので、今年久しぶりに現地でのサマースクール実施ということになり、それに参加できたというのはこの上なく幸運なことだと感じた。また、自分一人では到底サマースクールを成功させることはできず、メンバーと協力して初めて成功できたと思う。ここで感謝したい。そして、我々の活動をする環境を整えてくださった東京大学・南京大学の先生方、関係者の方々には頭が上がりません。特に数年ぶりの現地での実施ということで、大変苦勞されたと考えています。支援してくださったゼンショーホールディングスの関係者の方々にもここでお礼申し上げます。皆さん誠にありがとうございました。

印象記

5. 中国語授業担当教員（南京大学）からのコメント

5-1. 汪天源先生

二十日余の時間は瞬く間に過ぎ去り、初めて東京大学の二年生の皆さんとお会いした日の情景が、昨日のことのよう思い出されます。終業式での皆さんの素晴らしい発表、そして皆さんからの真摯な感謝と祝福の言葉を聞き、先生たちは皆、思わず涙ぐんでしまうほど感動していました。

私たちが共に学習に励んだ期間は長くはありませんでしたが、一教師として、東大の二年生の学生の皆さんに対して非常に深い印象を抱いています。皆さんが授業に真面目に臨み、真剣に学習を重ねていく姿勢に、教師である私自身も刺激を受けました。皆さんは、新たな知識と出会う度に念入りにメモをとり、いつもわくわくしながら質問をしてくれましたね。口語の授業での二回の発表でも全力を尽くして準備を進め、さまざまな課外活動に参加する傍らで、きちんと時間を守って無事にプログラムを修了できた皆さんは、本当に優秀な学生だと思います。

授業外でのアクティビティもとても充実していましたね。総統府や南京博物院、夫子廟や老門東の参観に加え、揚州旅行にも行っていましたね。また、無形文化遺産である泥人形作りや太極拳を学んだのみならず、企業訪問にも参加し、中国の製造業のリアルな実情についての理解を得られたと思います。今回の二十日余にわたる学習を通して、皆さんは知識や知見を身につけただけでなく、中国に対してより一層深いレベルでの理解を得られたと信じています。

東京大学のサマープログラムは、南京大学海外教育学院における優れたプログラムの一つであり、学生間の交流と中国文化の発信に長年貢献しており、国家間の文化交流を促す、友好の橋梁を築き上げてきました。南京を訪れて交流活動に参加した皆さんが、今後の人生の中でも引き続き中国語の学習に励んでくれることを祈ります。皆さん全員が自身の夢を叶え、前途洋々な未来を実現できることを南京から心より願っています。

日本語訳・韓美嘉

5-2. 王大瑩先生

今年、私は初めて東大生と対面して、授業をしました。コロナ前の3年間のオンライン授業に比べ、さらに深いものを感じました。東大生はいつも優秀です。授業では教科書の知識を真面目に学習し、積極的に意見を交換し、宿題は時間内に終わらせました。

加えて素晴らしいのが、南京での生活を学習の源とし、買い物、食事、交通、訪問など、日常生活の中で中国と日本の共通点や相違点を観察し、それについて深く考え、知識を広げていたことです。このような「随所に気を配って学ぶ」観察力・思考力は非常に貴重であり、文法と実践を融合させたやり方は、知らず知らずのうちに彼らの中国語力を向上させることにもつながっていました。

教室での交流だけでなく、休憩時間中の何気ないおしゃべりや、道中や食堂での出会いも、礼儀正しさや節度の裏側に、彼らの太陽のような明るさと若さあふれる活力を感じさせてくれました。

あっという間の3週間が過ぎ、授業が終わろうとしたとき、「南京での勉強と生活はとても楽しく、飽き足らず、家に帰るのを忘れてしまいたいほどです」という声が生徒から聞こえてきました。皆さんの中国語が本当に上達したこと、そして何より南京が大好きになったことが伝わってきて嬉しかったです。別れはとても名残惜しいですが、皆さんは良い思い出と未来への期待を残してくれました。これからも根気よく中国語を学び、二度と戻らない時間を大切に、自分の理想を勇敢に追い求め、将来大成してほしいと思います！

日本語訳・松浦 知希

6. 参加学生の感想

6-1. 南京の街で感じた、成長の兆し

松浦 知希

南京は上述したように悠久の歴史を誇る街で、数多くの歴史的遺産が残されている。孫文のお墓である中山陵、洪武帝の墓である明孝陵、孔子を祀る夫子廟、そして長年南京の街を囲むようにして現存する城壁など、その歴史を受け継ぎ、人々に伝えるものが多く残る。私たちは研修中これらの場所を訪れ、その歴史的重要性や、中国人がそれらの場所に対し民族の原点としての愛着を持っていることを学んだ。このように、南京の特徴は中国の一大都市としての長い歴史が挙げられる。一方、近年中国の発展は目覚ましく、他の先進国を追い抜くようにして経済大国へと成長した。これは中国がただ歴史の古いだけの国ではないことを表しており、国内・国外からの様々な情報を取り入れて国全体で急速な発展を遂げているのである。これは経済的水準を示す数値だけではなく、南京で日常生活を送ることからも感じ取ることができた。



まず、南京に来て気づいたことが、道端に置かれている貸出自転車の数の多さである。私たちが泊まった南京大学の寮は南京の中心地である新街口から電車で10分ほどの位置にあり、大都会とまではいかない立地である。そんな場所でさえ、10mも歩けば1台は自転車が見つかり、まして新街口に至ってはショッピングモールの前に大量のバイクと自転車が並べられてあり、その数ざっと400台ほどである。さらに、自転車は15

分で1.5元(30円)、30分で2.5元(50円)とかなりの破格で、乗る場所も降りる場所も大きな制限はなく、自由に乗り降りできるため、とても便利であった。そのため、寮から5km圏内であれば電車を利用するのではなく、手軽に使える自転車の利用が多かった(私は22日間で合計30回使用した)。この乗り降り自由の自転車は中国の道路が車道と二輪車道と歩道が別れていることや、道路が広いこと、自転車を大量に停めても歩行者の邪魔にならないこと、中国人がサドルの壊れや汚い自転車のカゴを気にしないことなど多くの要

因により可能となっているが、その利便性は住民の生活の利便性に直結しており、手軽にこういった交通手段を利用できない日本との差を感じた。

さらに、シェア自転車との関連であるが、ほとんどの決済が支付宝 (Alipay) を通して行えることもとても快適だった。中国では現金を使える店が少ないと事前に聞いていた。実際は、中国の法令により現金を取り扱うように指示されているために、現金を使えないお店は少なかった。しかし、現金よりはるかに QR コード決済が便利、かつポイント還元があるため支付宝を使わない手はなかった (ポイントが還元されすぎて地下鉄の乗車料やお店で買った水が無料になった時は流石に驚いた)。これはレストランや買い物の決済だけに限った話ではない。支付宝を通して、上述のシェア自転車の検索から支払いを行ったり、タクシーを呼んだり、外帯 (テイクアウト) を頼めたり、できる。お金に関するあらゆる機能が備わっており、困ったらこのアプリを使えば良いということだった。日本においてもキャッシュレス決済がだんだんと広まりつつあるが、中国ほどあらゆる決済が少ない手順で行えるサービスは未だない。こうしたプラットフォームを作ることからだと思うが、それを実現していることで中国人の生活ははるかに快適なものになっているだろう。

最後に、南京の街中で見つけた「山寨」の数々も中国の成長を示していると感じた。山寨とはパクリ製品を表す中国語であり、元々は山賊の住処、という意味であった。無印良品のパクリブランドやクレヨンしんちゃんの著作権をめぐる裁判のように、日本企業も中国企業

による山寨の被害を被っているが、街を歩いている中でそうした山寨を多く見つけるとともに、その意味するところを考えた。まず、なぜこれほどパクリ製品が生み出されてしまう要因は様々あるが、大きなものは国の知的財産権に関する



中国で見つけたもの



元のブランド

る法律より地方政府の権力の方が影響力が強く、パクリ製品が黙認されてしまうことにある。次に、こうしたパクリ製品を作る業者には「パクることはリスペクトである」という価値観があり、尊敬しているからこそパクらせて頂くのだ、という一種の開き直りがある。さらに、激烈な市場競争の中でどうにかして生き残るために、有名ブランドをパクる必要があるのだ。ここで私がこれら山寨に対して感じたことをは、確かに、元の製作者の知的財産権を侵害するものである上、消費者を騙すことにもつながるなど、悪質であることは

間違いない。しかし、こうしたパクリ製品をつくりまでしてなんとか生活を繋ごうという努力、元のブランド品の技術を少しずつ取り入れ改良することでよりリーズナブルな商品を作ろうとする才能（実際、iphoneなど電化製品の山寨の生産過程でより安価で高品質な部品を作る技術の開発がされることもあり、これは一種のイノベーションであると言える）、そして現に街中に多くの山寨が売られ人々の生活に利用されていること考えると、一概にパクリ製品は悪いものというわけではなく、発展の過程で必要となる戦略なのかもしれないと感じた。中国の成長の原動力が現れている、といっても過言ではないのである。実際、日本も大戦後、復興し目覚ましい経済発展を遂げるにあたってアメリカの製品を数多く模倣し取り入れてきた。山寨を通して、新たな技術を取り入れ貪欲に成長しようとする中国の一面を垣間見ることができたと考えている。

以上、南京で3週間生活することで見えた中国の成長の片鱗について述べた。中国は今成長の真っ只中におり、特に南京は二线城市と呼ばれるように、まだ発展途上でこれからさらに発達していく都市である。この成長は、近年世界の経済国としての地位が揺らぎつつある日本が見習うべきところが多くあるものであり、将来は中国で開発された製品を日本が“山寨”として導入する時が来るかもしれない。これからも中国の発展の動向に意識を向けていきたいと思う。

南京サマースクールでは、ここに書いた意外にも様々な経験、発見、学びを得られた。これらは全て、ともに生活を送ったプログラム参加者、現地で活動をサポートして下さった先生方や南京大の学生達、そして特に、プログラムに大きなサポートを提供して下さったゼンショーホールディングス様のおかげである。こうした有意義な活動は大変な資金面のサポートがあったからこそできたもので、これがなくては活動自体できなかったと思う。精一杯の感謝を表し、この経験を今後活かせるよう、今後も最大限努力していきたい。

6-2. 日中間の架け橋を考える

寺嶋 佑太郎

今年にはコロナ禍を経た4年ぶりの対面渡航であり、かつ10年目の節目であるため、今年度の活動が今後大きく影響するということ、伊藤先生をはじめとして先生方が何度もおっしゃっていたことから、日中関係の悪化などの様々な悪いニュースも相まって、渡航前は重い緊張感が満ちていた。しかし、南京で実際に生活してみると、その不安は次第に払拭されていった。私にとってその最大の契機は、私たちの活動を支えてくださった杭蕾先生や学生助教の方々などの温かい心だった。渡航初日に飛行機の運航が大幅に遅れ、宿泊先への到着が21時を回った時に、宿泊先で私たちを出迎え、夕飯を出前ですべてくださった。文化体験活動で私たち講師の方の説明を理解できずに困っていた時に、適宜日本語に翻訳してくださった。博物館や中山陵などに見学に行く時に、チケットやミネラルウォーター、音声解説機器や熱中症の薬などを確保し、私たちを先導してくださった。最終日に宿泊先から早朝4時半に出発する時に、宿泊先まで駆けつけ空港まで見送ってくださった。私たちは3週間の活動を充実したものにすることができたが、それはこれらのご厚意と、さらにこうした機会を提供してくださったゼンショーホールディングスのご支援があってこそであった。このご支援によって私たちは、毎日朝食を自分で確保せずに済んだり、著名な講師から中国文化を学べたりと、素晴らしい環境のもとで学習や交流を行うことができた。

もちろん、日中間に存在する懸案事項を棚に上げたままでは完全な関係とまで進歩させることは難しい。私たちと接した中国の方々のはほとんどは、南京大学海外教育学院などに属するような日本やその他外国にとりわけ融和的と思われる方々であったわけで、非常に充実した体験ではあったが、それで「中国を完全に理解した、何も心配することなく両国は完璧な友好関係を築いていける」と言い切ってしまうのは浅はかであるように思える。例えば、研修期間中に福島原発事故の処理水が放出されたのであるが、その件について話題にしている街ゆく人に遭遇したり、学生交流の場においては直接意見を求められもした。その時は、「敏感な話題に触れるべきではない」という先生方からの注意に則り、一般的に日本で言われている事柄を簡潔に伝える程度に留めてそれ以上その話題を続けることはなかった。相手の学生もとりわけ日本に友好的な方々であったからか、陰悪な雰囲気になることはなく、むしろ興味津々に私たちの話に耳を傾けてくれた。ただ、もし街ゆく人に対して不用意に応答していれば、彼らを傷つけてしまっていたかもしれない。日中に限った話ではなく、隣接する国の間には色々な問題が起きるものであり、双方が固有の相異なる信条を持っているのは当然のことであるから、交流するうえでは細心の注意を払わなければならない。とはいえ、隣国としての関係を途絶したり敬遠したりしては進展は望

めない。これは大変な難題ではあるが、今回の交流を通して、それを身をもって体感できたこと、そして冷静に歩み寄り互いに考えられたことは、解決の糸口を探るうえで非常に有意義だったと思う。

最後に、貴重な機会をもたらしてくださった南京大学海外教育学院、東京大学教養学部、ゼンショーホールディングスをはじめとする関係者の方々全員に、深く感謝の意を表したい。

6-3. 生の中国に触れて

木村 眞子

今回の南京サマースクールに参加する前は、楽しみな気持ちよりも、中国で拘束されたらどうしよう、食べ物合わず病気になったらどうしよう、などという不安の方が大きかった。しかし、南京での3週間の滞在を終えた今、このサマースクールに参加して良かったと心から感じている。

午前中の中国語の授業では、自分の発言内容に関して、よりネイティブに近い表現にするための文法や単語を教えていただいた。今まで知らなかった表現も多く、語彙の量と質を一層高めることの必要性を強く実感した。また、先生方から常に「なぜそう言えるのか」「なぜそう思うのか」と聞かれたことも印象に残っている。これまで駒場で受けていた授業では、中国語で何か一文でも答えると、先生に自分の言いたかったことを汲み取ってもらえていたため、何となく中国語で会話できている気持ちになっていた。しかし、南京大学の先生方の、徹底的に自分の言葉で説明させようとする姿勢に触れ、どんな言語を使うにしても、自分の考えを最後まで論理的に説明しようと努力することが大切であると改めて感じた。

午後の活動では、名所を訪れたりグループで街歩きをしたりして、南京の文化や食、歴史を体感することができた。街を歩いていて印象的だったのは、至る所に標語が掲げられていたことである。地下鉄の駅やバス停の看板に「社会主義国家の核的な価値観」が列挙されていたり、飲食店に「食べ物を大切に」と書かれたポスターが貼られていたりした。南京大学の運動場にも、「競って上を目指そう」というような意味の、赤と黄色の垂れ幕が下がっていた。標語の中に「文明」という文字が多いことも気になった。日本での日常生活ではあまり使われない言葉だと思うが、中国は文明的・道徳的な国家の建設を意識していることが感じ取れた。また、詳しい文言は忘れてしまったが、私たちは国家と一体であるというような意味の標語も見かけ、国民と国は運命共同体であるかのような書き方に驚いた。このように街中に標語が掲げられているところに、社会主義国家の片鱗がうかがえる気がした。

南京での生活を通じて、中国では日本に比べてデジタル化が急速に進んでいることも実感した。地下鉄ではQRコードをかざして改札を通り、飲食店ではアプリで注文から支払いまで全てを行うようになっていた。博物館の音声ガイドでは、展示品の番号を入力しなくても、展示品のある場所に行くと自動で音声再生されたことにも驚いた。AlipayやWeChat payがないと、お店での支払いができず、地下鉄に乗るのも時間がかかるなど、日常生活に支障が出るような状況であり、どちらのアプリも使えなかった私が3週間生活できたのは、ひとえに支払いを毎回立て替えてくれた友人たちのお陰である。

このように発展著しい中国だが、健康に対する意識の面ではまだ改善の余地があるのではないかと感じた。例えば、カフェでタピオカミルクティーを注文するとき、追加する砂糖の量を選べるのだが、一番少ない量でも十分甘いと感じるくらいなのに一番多い量がおすすめされていたことに驚いた。また、日本に比べて路上喫煙をしている人がとても多かったことも気になった。サマースクール中に受けた中国経済についての講義で、講師の先生が「『(GDPなどの数値の)増加』と『(国家の)発展』は異なる」と仰っていたのだ

が、やはり国が本当に発展したと言えるためには、経済面での成長だけではなく、健康や環境に対する人々の意識も改善されることが必要なのではないかと思った。若者を中心に健康に気を遣う人が増えているとも聞くが、今後どのように人々の意識が変化するのか注目していきたい。

今回のサマースクールを通して、中国を肌で感じ、中国語や中国という国に対する理解を深めることができた。9人のメンバーと一緒に過ごした3週間は毎日本当に楽しく、あっという間に過ぎてしまった。部屋や移動中のバスの中で、ワードウルフをエンドレスでやっていたこと、休日に玄武湖の周りを長時間かけて歩いたこと、宿舎の2階にあった食堂で、おかずがどれも美味しそうで、どれを食べるか毎回迷っていたこと、コインランドリーがある大学の建物の地下で皆で卓球をしたこと、毎晩のように果物パーティーをしていたことなど、どれもとても良い思い出である。このような経験はオンラインではできないものであり、コロナや情勢面での不安を抱えつつも今回渡航できて本当に良かったと思っている。

最後に、このサマースクールを企画し、引率して下さった東京大学および南京大学の先生方とTAの方々、そして金銭面でご支援を賜ったゼンショーホールディングスの皆様に心より感謝申し上げます。貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。

6-4. 南京サマースクール全体の感想

田中 渚

まず中国語に関してですが、現地で中国語が飛び交う中で生活するというのはやはり中国語の習得において大きな助けになるなと感じました。中国語の授業でも、先生が日本語を話せる東大での授業とは違い、うまく中国語で言えなかったとしても自分のボキャブラリーと文法を駆使してなんとか伝えようとしなかつたので、必然的に話すことへの抵抗感が少なくなったと思います。今回の研修は3週間という短い期間だったので、目に見えて大きな成長があったというわけではないかもしれませんが、意識面ではかなり変化を感じました。一方で、現地の一般人と話すときに普通のスピードで話されると、なまりもあって全然聞き取れず、実用レベルまでリスニング力を上げることの難しさを痛感しました。自分は次の学期でも中国語の授業をとるつもりですし、南京サマースクールを経て中国語学習へのモチベーションも上がったので、これからは特に中国語を聞く機会を増やすとともに、語彙力強化にも力を入れなければならないなと思いました。

中国語以外の面では、3週間滞在したことで、南京市内のメジャーな場所にはほぼ行くことができ、また現地の生活を体験して空気感に直に触れることができました。その中で特に印象に残ったのが、シェアサイクルのサービスです。私たちは Alipay と連携して利用できる Hello bike というサービスを利用していたのですが、本当に安く(15分で約30円)自転車を借りることができて、なおかつ決まった駐輪ポートがないのでどこでピックアップしてもどこで乗り捨ててもいいという、とても魅力的なサービスでした。中途半端な距離の移動にとっても便利だったので、男子勢は宿舎の近くでご飯を食べたり買い物をしたりするときに愛用していました。また、それと関連して、現地の交通ルールやマナーも印象に残りました。日本と違って中国では電動スクーターが無免許で乗れ(16歳以上)、かつ自転車と同じ扱いになっています。そのため、自転車に乗った際にスクーターと同じレーンを走らなければならない、またスクーターは全体的に運転が荒く横スレスレをすり抜けられることが多かった、たびたびぶつかりそうになり最初のうちはとてもヒヤヒヤしました。ですが、回数を重ねていくうちに慣れ、あまり気にせずに乗れるようになりました。交通マナーに限らず、現地の人は様々な面でかなり適当なところがあり、私たちにとっては軽いカルチャーショックでしたが、南京での3週間を経て、あらゆる面での図太さ、忍耐力というのは多少身についたのではないかと思います。他には、電子決済の浸透度の高さも非常に印象的でした。どのような類の支払いでもほぼ必ず Alipay もしくは WeChat Pay を使うことができ、現金を全く持っていなくても普通に生活することができました。全てを電子決済でカバーできるというのは一見とても便利ですが、私たち外国人にとっては不便な面もありました。例えば、授業を受けた建物の地下にあったコインランドリーは WeChat Pay のみでしか支払いができず、私たち9人の中で WeChat Pay の申請をクリアできたのは2人のみだったため、彼らがいないと洗濯ができないという状況でした。個人的には、現金を使わない支払い方法のみにするとしても、クレジットカードとQRコード決済というように複数のオプションを設けて欲しいなと思いました。

今年の南京サマースクールは、情勢的な問題により、安全面の懸念がかなり高いものとなりました。その中で、先生方は現地で私たちの安全を確保しつつも、可能な限り自由な

行動を許してくださり、その結果私たちは安全に、思う存分南京生活を満喫することができました。先生方には本当に感謝しています。南京大学の方々も、ここ3年コロナ禍でオンラインとなっていた中で今年是对面での受け入れ体制を整えてくださり、私たちに快適な学習環境を提供していただきました。本当にありがとうございました。また、本サマースクールは、株式会社ゼンショーホールディングス様からいただいた多額の寄付金があったからこそ成り立ちました。本当にありがとうございました。

今回の南京サマースクールでの経験を、これからの中国語学習、そして自分の人生に活かしていければと思います。

6-5. 語学・文化・絆

仲本 梨乃奈

私が二外として中国語を選択した理由は、世界で最も母語話者数が多い言語であるからです。それはつまり、中国語を話す人々は世界に対して大きな影響力を持つということの意味し、それゆえに中国語学習の必要性を感じていました。そして今回、1年半に及ぶ日本での中国語学習の末、ついに実際に中国大陸を訪れる機会をいただきました。本研修での私個人の目標は、中国語力全般の向上はもとより、対面でのコミュニケーションに必要不可欠なリスニング力・スピーキング力を高めることでした。3週間の研修期間中、毎日の授業に加えて様々なプログラムが実施され、現地の人たちと交流する機会にも恵まれたため、この目標は想像以上に大きく達成されました。入学以来の努力が実を結んだように感じられ、本研修に参加して良かったと心から思っています。

また、3週間の現地生活を通して中国の文化を肌で感じることも貴重な経験の一つだと思っています。人柄・食べ物・交通・生活様式など、日本とはまるで異なる文化を体験できたことは、中国文化の理解だけでなく、日本文化の再認識にもつながるきっかけとなりました。

このように、南京滞在時には異国の言語や文化にあふれた環境下での生活によって期待以上の収穫がありました。もうひとつ予想以上に得られたものがありました。それは、同級生たちとの絆です。つい数ヶ月前の研修説明会で初めて顔を合わせたとは思えないほどに、この3週間で私たちの仲はとて深まりました。昨年の研修報告書を見てみると、コロナの影響でオンライン開催だったせいか、東大生同士の交流の少なさに思い残すことがあるようでしたが、今回は4年ぶりに対面開催を実現できたということで、南京研修の良い副産物を取り戻せたようです。同じ志をもった仲間たちと授業を受け、プログラム活動に参加しただけでなく、朝昼晩の食事をともにし、バスケ・卓球・ランニングなどで体を動かし、毎晩恒例のフルーツパーティーや女子会を開くなど、プログラム外で育んだ絆はとて強いものとなりました。自由時間には遊びに出掛けて思いっきり楽しんだことも課題に追われて苦しんだこともありましたが、どれもみんなで過ごした良い思い出です。南京研修で一緒になったこの縁をこれからも大切にしたいと思います。

お世話になった伊藤先生・白先生・菊池先生と、南京大学海外教育学院の朱院長をはじめとする現地の先生方にも、大変感謝しています。今回の南京研修が東京大学と南京大学とのあらたな10年のはじまりであることを誇りに思うとともに、今後とも変わらぬ両校の親密な関係を心より願っております。

最後に、今回の南京研修でこれだけ様々な収穫と成長を得られたのは、ひとえに、研修実施にあたって多大なるご支援を賜っておりますゼンショーホールディングス様のおかげです。心より御礼申し上げます。このような貴重な機会をいただけたことに感謝し、今後も世界に目を向けて主体的に挑戦を続けていく人でありたいと思います。

6-6. プログラム全体の感想

飯田 奈那

プログラム全体の感想は、中国語面・文化面の2つに分けて述べさせていただきます。

まず中国語に関しては、四技能全ての面において上達を感じることができました。中国現地にいたことで中国語に触れる機会が多かったこと、また授業で学習したことをすぐ使機会が多かったことが理由として挙げられます。例えば「依我看」など便利な表現は指名された際や数多くあったプレゼンテーションで積極的に使ったり、授業時間以外の参加学生同士の会話で使ったりすることで浸透していきました。授業内で扱った表現や単語は中国語で頻繁に使われているものが多く、街や映画の字幕内で見かけることもありました。また、毎日覚えるべきことが多くあったため中国語を覚えたり脳内で処理する速度が上がった実感があります。実際、先日 HSK6 級を受験した際、プログラム前に受験した 5 級の時は読解問題の試験時間は余りませんでしたが 6 級では数分余っていました。また、リスニングも 5 級を受験した際に比べてはるかによい感触を得ることができました。ひとえにプログラムの効果であると感じています。

文化面では、プログラムに含まれている文化関連の授業や訪問に加えて自由時間にさまざまなことを目にすることで文化をよりしっかりと体感することができました。例えば授業では太極拳を行いました。実際に観光地や道路で同じような動きの太極拳を行っている方を何人か目にしました。日本でいうラジオ体操くらい気軽に行われているものなのかもしれません。また、授業中に扱った「广场舞」も実際に鼓楼駅上の交差点前で踊っている人が多くいました。他にも中国での飲み物の文化が豊かなことをお茶の授業とスーパーマーケットの両方で感じることもできたりと数多くの学びがありました。

余談となりますがプログラム中の自由時間に 5 回も観に行った映画について記しておこうと思います。中国では方言が多いためなのか、中国で製作された映画にも中国語字幕がついていることがほとんどです(観た映画 4 つ全てに中国語字幕がついていました)。また、その中で半数程度の映画には英語字幕もついています。字幕と音声と英訳を同時に見ることができるため中国語学習の点でも、プログラム後の中国語学習のモチベーションを保つ上でも効果的でした。現地の学生の方々と交流する際もよい話題となりました。現地で見た映画のうち 1 つである《孤注一擲》より台詞を 2 つ以下に引用させていただきます: 「想成功 先发疯」「人有两颗心,一颗是贪心,一颗是不甘心」1 つめは、成功するにはまず狂ったように努力しなければならないという意味で中国での努力への考え方が現れています。2 つめは、人はもっと多くのものを求める心と現状に満足しない心の 2 つを持っているという意味です。(作中で貧困から脱出するために悪事を働いている人物たちが 1 つ目の台詞を唱えており、その他の人のもつ欲がその悪事をさらに助長していることから)皆生きるために努力をしていてその結果悪者と善者がはっきりと存在しない場合もある、そしてその混沌の中でもやはり生きるための努力を続けなければならないといったメッセージを感じました。

以上の学びは本プログラムに参加させていただき中国本土にいたからこそ得られたものです。以後もそれらを活かせるよう、中国語学習や中国について調べることを続けていこうと思います。

最後に、本プログラムに多大なるご支援をいただいたゼンショーホールディングス様及び調整・準備などを尽くしてくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

下写真: 3週間授業が行われた教室



6-7. 南京で感じた「変わる中国」と「変わらない中国」

並木 勇輝

2S セメスターに入ると、必要な単位をほぼ取り切っていたのもあって、僕は中国語の学習に力を入れようとしたのだが、履修登録をしている際に南京サマースクールの存在を知り、参加しようと思った。今考えると本当に参加してよかったと思う。

5月中頃に選抜試験の結果を知らせるメールが届き、サマースクールへの参加が決まってもう一安心したが、僕は TLP 中国語の学生ではなかったため、うまく他のメンバーとコミュニケーションが取れるかについて少し不安もあった。しかし、事前の説明会で先生方に南京サマースクールについて詳しく教えていただき、事前学習でもメンバーたちに快く受け入れてもらい、不安は解消した。そのおかげで渡航前に非常に良い準備ができたと思う。

出発当日のことは非常に印象に残っている。成田空港に集合し出国審査を終えて飛行機を待つのだが、出発が遅れるとアナウンスが入りその後も飛行機が到着する気配がない。やっと飛行機が到着し離陸するが、台風のせいで機体が何度も大きく揺れた。結局南京禄口国際空港に到着したのは午後6時頃になってしまった。予定から二時間半ほど遅れたことになる。到着後になぜか wechat のアカウントが凍結されたメンバーが出てきてしまい、健康申告のバーコードが出せないのではと少しひやひやしたが、なんとか入国審査を終わらせて南京大学の先生と合流し、バスに乗り込み南京の市街地に向かっていく。途中渋滞もあり、宿舎に到着したのは夜9時頃だった。手続きをしてルームキーを受け取り部屋に入ると、窓からの夜景がとてもきれいだったが、どっと疲れが出て見る余裕はなく、椅子に座ってしばらく動けなかった。引率していただいた白先生、伊藤先生はさらに疲れていたのではないと思う。就寝時にこれから三週間のプログラムへの期待、そしてうまく最後までやり遂げられるかの不安の気持ちを抱いたことを記憶している。

二日目以降は非常に充実したものだ。午前中の精読、会話の授業では僕たちのレベルに合わせて南京大学の王先生、汪先生に授業を行っていただいた。中国語での発表も数回あり、平日毎日ある授業は大変ではあったが、中国語能力の向上に非常に効果があったと思う。

授業の後は午後のプログラム開始まで昼休みがあった。時間が短いときは宿舎一階・二階の食堂で昼食をとったが、最初のうちはついつい色々なメニューを注文してしまい、辛さが予想と違ったり、食べきれなくなりそうになってしまったこともあった。しかし、滞在が長くなるにつれて適切な量と自分が好きなメニューが分かり、楽しく昼休みを過ごすことができた。時間に余裕のある時はキャンパス付近で飲食店を探したりもした。お気に入りのお店を見つけたり、日本では食べられないものを食べたりと、いろいろと楽しみがあった。

午後のプログラムは様々なものがあり、キャンパス内では粘土で作品を作ったり、中国茶道を体験したり、太極拳を教えてもらったりした。またキャンパス外では総統府、南京博物院を見学したり、企業訪問をしたり、南京大学の大学生、南京の高校生と交流をしたりした。これらを通して中国の文化・歴史についての理解が非常に深まったと感じる。特に大学生との交流では南京の市街地を回って楽しみながら、お互いの国について知らない

ことを聞いたり、思わぬ共通点を見つけたりでき、高校生との交流では自分の高校生活と現地の高校生の生活との共通点、相違点を考えるのが興味深く、また彼らの日本に対する印象、考え方も知ることができ、非常に貴重な経験になったと思う。

このように大学側で設定されたプログラム自体非常に充実したものだったが、平日のプログラム終了後と土曜日、日曜日に自由時間も確保されていた。その中で現地でしかできないことを多く体験できたと思う。値段の安い果物をたくさん買ってメンバーで分けて食べたり、長江にかかる橋を自転車で渡ってみたり、現地のヒット映画を見たり、お寺を巡ってみたり、自分で積極的に自由時間を活用することができたと思う。また、その中で街や人の雰囲気を感じたり、出かけた先で中国語でコミュニケーションを取ったりと、かなり有意義な時間にできたと感じる。

これら様々な体験を南京ですることができたが、その中で中国の「変化」を感じる場面がかなりあった。個人的に中国への渡航は約4年ぶり、一番驚いたのが携帯の決済アプリの利便性だ。渡航前に中国では以前に比べてかなり広がっていると聞いてはいたが、いざ自分で体験してみるとその便利さに驚いた。普通の買い物はもちろんバーコードを読み込ませるだけですぐに決済ができるが、アプリ一つで地下鉄、バスに乗ったり、自分のいる場所に車を呼んだり、街に置いてある共用の自転車を借りたりと、交通に関する支払いは全て可能だった。それに加えて出前を頼んだり、映画のチケットまで予約することができた。そして以前は見られなかった光景だと思うのだが、あまりに決済アプリを使う人が多いのか、僕たちが現金で支払いをすると、偽札でないかどうかお札を光にあててチェックされることにも驚いた。

外出する際に道路を渡るときにも「変化」を感じた。以前は横断歩道を渡るとき、わざわざ歩行者が渡り切るまで車が待つということは少なかったが、今回のサマースクールの期間では逆に譲ってくれなかった車自体なかったのではないかと思う。理由はどうやら道路上に監視カメラが設置され、交通違反をすると車が特定されてしまうためらしい。実際、犯した違反と車のナンバーが一緒に表示された電光掲示板を街中で何度か見かけた。理由はどうであれ、車の交通マナーが日本と同等か、それ以上にまで改善されているのに驚いた。

このように中国で起こっている変化は大きかったが、今回のサマースクールでは中国の変わらない面も発見できたように感じる。例えば、人の温かさだ。杭先生を中心とした南京大学の先生方、関係者の方の親切さはサマースクールの期間中常々感じていたし、街中の一般のお店でも店員が日本人の僕たちを見て丁寧に対応してくれたり、果物店では店主が会計で端数の分を値切ってくれたりした。こういった部分は昔から変わらないなと感じた。

今回、南京サマースクールに参加したことで自分の中国語の能力は向上したが、それ以上に実際に現地での生活を経験して、中国語学習のモチベーションが向上したということが大きいと思う。この点で南京サマースクールに参加できて本当に幸運だったと感じた。また、現地で三週間一緒に助け合ったメンバーたちと仲良くなれて、絆を深められたのも良かった。誰か仲間たちとこれほど長い期間ともに生活し、学習することはこれまでも、これからも少ないと思うので、非常に貴重な経験になったと思う。

6-8. 食事から振り返る南京サマースクール

印藤 直晃

研修の実り多からんことを願って書き始めた日誌は、課題と疲労の蓄積に伴って次第に文量を減らし、ついには単なる食事記録と変じてしまった。日誌の記述をもとにして思い出深い三つの食事風景を再現することで、中国の社会と生活の一側面を紹介するとともに、南京で過ごした日々のヒトコマを描き出したい。

8/10（木） 夕食

店名：沙鼎小吃

注文：餛飩面、可口可乐



その日は昼から歓迎の宴会が催され、南京大学海外教育学院の朱副院长自らがホストとなって、円卓を埋めるほどの南京料理でもてなしてくださったのだった。飽食の腹を抱えて炎天下の南京大学一帯を散策していると、さすがに学生街だけあって、小洒落た喫茶店や大衆食堂の類が至る所に見られた。

帰途、宿舎に通じる坂道を上る途中に沙県小吃と書かれた看板が目にとまった。中国を代表するチェーン店としてその名はかねて聞き知っており、中国人に愛される味に俄然興味が湧いた。涼しい自室で一休みするとだんだん食欲も回復し、日が暮れるのを待って南京到着後最初の外食を執行することにした。

清潔な店内には四人掛けの机が 8 卓並び、おおよそ半分ほどが埋まっている。そのうち一卓は店を切り盛りする一家が占用し、大人は雑誌に、子供は宿題に没頭している様子だった。後日店の前を通りがかった友人によれば、早朝にも関わらず一家総出で餃子の皮を作っていたのだという。フランチャイズではあるが、オーナー家族の個人経営のような雰囲気のお店だった。

沙県小吃の一番の特長は、何を頼むにも非常に安いことである。写真に示したワンタン麺は十元一碗、日本円にして僅か 200 円だった。味のほどはさっぱりとして日本人の口に合い、友人が頼んだ料理もみな美味であったことから、以降研修期間を通じて沙県小吃を常用することとなった。

支払いには現金も使えるようだったが、店内の他の客に倣って Alipay を使うことにした。コロナ禍を経た中国にはキャッシュレス決済が隅々まで浸透し、観光地の露天商までもが首から QR コードを下げている。沙県小吃もその例に漏れず、会計机にはレジスターの代わりに Alipay と WeChat Pay のコードが貼り付けてあった。

早速 Alipay のリーダーを開いて決済を試みるが、紐づけていたクレジットカードが使えないなど、次々と問題が起こってもたついてしまう。だが、店の老板娘（女主人）は腹を立てることもなく、むしろ親切にも我々の決済を手助けしてくれた。今思えば、我々の南京生活は中国の方々の親切によって支えられていたのであった。

8/19 (土) 夕食

店名：食其家 (外卖)

注文：温泉蛋★牛井



長江を自転車で渡るといふ気宇壮大な計画を立案したのは果たして誰だったろう。時刻ははや 19 時を回り、とうに日の落ちた南京長江大橋を壊れかけのシェアサイクルで滑り降りた我々は、肩で息をしながらライドシェアの到着を待っていた。21 時の門限を考えると今更レストランに寄ることも叶わないが、このままでは空腹で寝付けそうにもない。熟議の末、宿舎まで外壳を頼むということに落ち着いた。

外壳とは中国における出前の呼称であり、料理だけでなく生鮮食品や薬も届けてくれる便利なサービスだ。バイクに乗って出前を届けるお兄さんのことは外壳小哥と呼び慣らし、就業難の現在にあっては高学歴者も見受けられるのだという。

そんな彼らが最も恐れるものは中国の交通事情と顧客からの差评（低評価）のいずれかであるようだ。南京で暮らした三週間のうち、外壳小哥が絡む交通事故を目にしたことは一度や二度ではない。先だって豪雨の日の昼食に外壳を頼んだ折も、到着間際に小哥から焦り声の電話が入り、燴麵片（きしめん）をひっくり返してしまったので賠償したい、低評価はつけないでほしいと懇願されたのだった。時間に追われ、危険と隣り合わせで、尚且つ薄給の外壳小哥たちには、滅多なことで低評価をつけないのが暗黙の了解である。

さて、ライドシェアのセダンに乗り込み、アプリを開いて頼むべき外壳を探し始めた我々は、程なくして予想外の問題に行き当たった。まだ20時だというのに、多くの店が営業を終えていたのである。もはや食べたいものを悠長に考えている余裕はなく、必死の検索の末に一人が「牛井」の文字を発見するや、みな一も二もなく注文を揃えた。その時はついぞ気づかなかったが、届いた袋を開けてびっくり、店名の「食其家」とはすき家のことだったのだ。

外壳小哥の荒い運転にも耐えうるように嚴重に梱包された井を開けると、日本のすき家と寸分違わぬ香気が漂ってきて望郷の涙を誘う。中国にある外国料理店は大幅にローカライズされていることも多く、滞在中に訪れたイタリア料理店と韓国料理店では八角や五香粉の香りに驚かされたものだが、すき家の牛井はまさしく日本そのままの味であった。

8/26（土） 昼食

店名：南京大学仙林校区学生第六餐厅

注文：砂鍋牛肉



南京市は東京 23 区の 10 倍の面積を有し、東端の棲霞区では豊かな自然に出会うことができる。我々は南京大学の主要施設が位置する仙林キャンパスを見物するため、棲霞区に乗り入れる南京地鉄 2 号線に乗り込んだ。

その日の天気は雲ひとつない快晴で、つくばエクスプレス沿線を彷彿とさせる車窓の景色はいかにも爽やかだった。小洒落た新築のマンションや駅前のショッピングセンターといった光景は、長江西岸の殺風景な工業地域と好対照を成しており、南京都心部よりもかえって住みよく思われるほどだった。

南大仙林校区駅を降りてキャンパスに入ると、そこはさながら地上の楽園である。広大な敷地には 2 つの山と 9 つの食堂があり、学生や教職員はシェアサイクルやシェアバイクを使って構内を移動する。建築はどれも真新しく、自然とよく調和していた。

我々が起居する南京大学鼓楼キャンパスは中華民国期の国立中央大学のキャンパスを引き継いだもので、交通の利便性は良いものの手狭さと設備の古さが否めなかった。とりわけ学生食堂はネット上で中国一の不味さの評判を取っていることから、概ね好評を受けている仙林キャンパスの食堂まで足を伸ばして中国の学食を体験する心積りだったのだ。

自転車に乗りながら学食を探していると、休業中の第四食堂の目の前に核酸採様検測所を発見した。コロナ禍の中国では住区ごとに住民のコロナウイルス核酸検査が義務付けられていたのだが、動態清零政策の終了を受けて都心部では検査所の撤去が既にほぼ完了していた。それが南京大学構内に残っていたのは、あるいはクラスターを懸念してのことだろうか、それとも単に撤去が遅れただけなのだろうか。いずれにせよ、消えゆく一時代の象徴であることには間違いなかった。

第六食堂に入ると、夏季休業中（中国の大学は 9 月始業である）にもかかわらず寮に居残っている学生で混み合っていた。注文した砂鍋牛肉（牛肉の煮込み）は自席に運んでもまだ煮立っており、口に運ぶと食感豊かで、評判通りの美味しさである。学生の懐に優しい価格設定もありがたいが、何よりボリューム満点なのが嬉しい。学生証（プリペイド機能を持つ）と WeChat Pay 以外の決済手段を受け付けないことを除けば、総じて大満足の昼食だった。

サマースクールにおける学びの機会は日々の授業に限定されない。食事をはじめとする日常生活の各場面から、かくも豊かな知見を獲得することを可能にした点において、三年越しに復活した現地開催の意義は強調してもしきれない。また、南京での生活を通じて中国語の実践的運用能力が大幅に向上したことは言うまでもない。

事前準備や現地での滞在にあたり、東大・南大の先生にはひとかたならぬお世話になった。また、ゼンショーホールディングスの皆さまには、プログラムへの全面的なご支援をいただき、感謝の念にたえない。この場を借りて関係の皆様へ篤く御礼を申し上げる。

反省会

7. オンライン反省会（2013年9月26日）

寺嶋 佑太朗（司会）

伊藤先生：サマースクール終わって一ヶ月になろうとしているくらいですけども、今日は、わざわざ皆さん、集まっていただきましてありがとうございます。今回の南京サマースクールは、コロナ禍が3年間あって、4年ぶりに中国に渡航して、現地でサマースクールを受講してもらったということで、コロナ禍の間にいろんなことがあり、中国の外国人に対する受け入れ体制の変化もありということで、他にも、リスク要因、色々あったんですけども、それをなんとか乗り越えて、皆さんが無事に3週間のサマースクールを終えられたということは、本当に良かったなと心から思っています。

サマースクールの責任者、企画者としては、皆さんは、この南京サマースクールの、体験者、参加者、かつて参加したある種のOB、OGっていう、そういう体験を持った東大生としてですね、自分を示すアイデンティティの一つとして、2023年度の南京サマースクールの3週間を過ごした一員であるということで、過去の先輩方、それから、今後もこれは是非とも私は続けていきたいと思っておりますけども、今後生まれてくる南京サマースクールの参加者の後輩たちとのコネクション、人間的繋がりというか、ある種の同窓会みたいな発想でもいいと思いますけれども、そういったアイデンティティを持って、今後も成長して行ってほしいという思いがあります。

その一方で、私たち教員側、企画者側としては、大きく言うならば、これもある種の国際関係というか、日中交流なんですね。10年ぐらい、これを続けてきています。その中には本当にいろんなリスクがいつまで経っても消えないというか、今後も続くと思うんですけども、多くの場合は、日中関係、特に政府間での問題が非常にクローズアップされるんですけども、このサマースクールは、直接中国政府との関係ではないですね、日中交流といっても。直接的には、南京大学、そして、海外教育学院という、中国という国の中では、本当に部分の部分に過ぎませんが、実際の、人と人との交流、国際交流っていうのは、大体こういう形で、部分と部分が交流し合う。その際に、尖閣諸島の問題なんかが起こった場合でも続けたっていうのは、お互いに、ある種の信念があった、そして、その後10年間こうやって続いてきたということで、ある種の信頼関係ができていくってことがあります。

あちらの担当者の方、それから、こちらの担当の教員が、個人的にもう顔も知っているし、話もしたこともあるしっていうことはもちろんあるんですが、たとえ、その担当者が、今回、これまでずっとあちら側の窓口を担当してこられた阮先生が、退職が近づいていて、今年から杭先生に交代されましたけども、そういったことがあっても、南京大学が東大生を8月に、10人ぐらい、あるいは20人ぐらい受け入れるという約束をして、それを続け、

お互いにそれを良しとしている。そうすることが、お互いにとって良いし、大きくは、日本と中国にとっても良いことだということで、ある種の信頼関係ができています。それを10年間続けてきて、歴史化してきたわけです。そして、それは、今後にも当然伸ばしていきたい、続けていけるんですね。

今回、皆さん1人1人が、その歴史の中のつなぎ目の1人1人になっていただけたわけで、今後も、それを引き続いて、将来の後輩たちに繋げていってほしいという風に思っています。

今日はなるべく、ざっくばらんに、皆さんから感想とか、あるいは気がついたこと、それから、これは困ったなとか、嫌だなと思ったことなんかも、皆さんの口から聞きたいと思っています。報告書でも感想とか印象とか書いていただくことになっていきますけれども、文章を書くっていうことと、今日のこの反省会で、気ままに色々話してもらってことは、やっぱりちょっと違うし、なるべくなら、やっぱり生の声を、記録として残したいっていうのは、1つは、さっき言ったように、その歴史をちゃんと繋いでいくっていうことと関わっています。

今回は、やはり渡航したことによって、皆さんが得るところも多かったと思うんですが、皆さんの方から、貴重な体験、それから、自分がそこから体得したもの、得たもの、あるいは、ちょっといろんな文句でもいいと思います。こういうことがあって、これはちょっとどうかと思ったみたいなの、そういったこともいいんですね。それもやっぱり貴重な体験なので。そういったことを頭に入れて、今日の反省会に関しては、率直なところ、ざっくばらんにいろんなことを聞かせていただければと思います。

寺嶋:今日の全体の流れとしては、軽く振り返りコメントを1人ずつ言った上で、その後、余った時間で、反省点とかを共有していければなという風に思っています。

まず、僕の方から、振り返りコメントと、あと、田中さんから預かっているので、それを読み上げていきたいと思っています。

個人的な今回の感想としては、事前に聞いていたよりも、すごく充実して、楽しみつつ、安全に中国を体感することができたっていうことが、1番大きかったんじゃないかなと思います。渡航する前は、先生方からもあんまりいいニュースは聞いてこなかったの、すごい緊張感に包まれていたんですけども、その緊張感が、南京に渡航してから解けていったってことがまずあって、そのきっかけとしては、やっぱり、南京の方々の温かいご支援の心があったんじゃないかなっていう風に思います。

まず最初に感じたこととしては、最初の日、飛行機の運行がすごい遅れて、宿泊先に到着したのが夜9時を回ってしまった時に、(助手の)崔さんとか、色々な方が出迎えてくださって、夜ご飯取ってくださったりとか、文化体験の活動の時に、チケットや音声解説の機械を手配してくださったり、あと、最終日の朝4時半に西苑まで来て空港まで見送ってくださったりして、そういうところがやっぱり大きかったんじゃないかなっていう風に思います。

特に良かった点としては、東大と比べると、午前中の授業が8時からで、慣れない中で、円滑に、あまり遅刻とかも聞かずに受けられたってのが、やっぱり、宿泊先と教室と

の距離がすごい近かったっていうのと、あと、朝食を準備してくださってたっていうところが大きいんじゃないかなと思います。あと、南京の重要な観光地、中山陵とかは、全員で行く機会が担保されてたし、そうでありつつも、自由時間は一定数確保されていたところが、楽しめた、のびのびと過ごせた大きな理由なんじゃないかなと思います。

反省点としては、wechatが初日で使えなくなっちゃったと。で、あらゆる連絡をメンバーに頼るしかなかったところが、僕に限らず、田中さん、仲本さんも使えなくなっちゃったんですけども、そういうところがあったかなと思います。あと、wechatpayしか使えないところが多々ありまして、洗濯機ですとか。幸運に2人使えたので、なんとかあったんですけども、もし、使えなかったらどうなっていたんだろうっていうところが、困ったというか、反省点かなと思います。

今回、水曜日から水曜日だったので、自由な土日がそこそこあったんですけども、元々の日程は日曜日から日曜日で、南京に到着する日、南京から出発する日は実質潰れるので、そこで、揚州とか中山陵に行ったりしていると、あんまり自由な時間がなかったのかも知れないなっていう風には感じています。

僕の感想は以上で、田中さんのを紹介します。

(田中：) まず、今回の中国語南京サマースクールは、4年ぶりに対面で現地に行つての開催が実現したということで、僕たちは非常に運が良かったかなと思います。実際に現地足運ぶことによってこそ体感できる空気感だったり、現地の文化の身体レベルでの理解だったりという面で、より深いとても貴重な経験をさせていただきました。

ただ、今回はコロナ禍という懸念がなくなった一方で、情勢的な問題から安全面での懸念が生じてしまい、参加を辞退する人も出てしまうほどでした。

主に菊池先生から渡航のリスクについてかなり悲観的な内容を言われていたこともあって、僕も渡航前はかなり不安だったんですけど、いざ行ってみると特に目立ったトラブルもなく、無事に3週間の研修を終えることができました。これは東大、南大の先生方が安全面に配慮して色々プランを練ってくださったおかげだと思っています。

また、安全面に気を配りつつも、先生方は僕たちを信頼して、フリーの時間に自由な行動を許してくれました。

個人的に特に印象に残っているのが、男子勢で自転車に乗って長江大橋を渡つたことです。実際に行ってみたら、思っていたのと違って道がとても狭くて自転車にはかなり危険でしたが、夜景も綺麗でしたし、本当にいい思い出になりました。ただ、後でそのことを菊池先生に話したら、「危ないから来年は禁止しようかな」と言われてしまいました(笑)。もしそうなるならとても残念です。僕は自分たちで行き先を決めて街を探索する、名所を満喫するということが現地に滞在することの醍醐味だと思っているので、このような経験をさせてくれた先生方には本当に感謝しています。

次に、中国語に関してなんですが、日頃の大学での中国語の授業と大きく違ったのが、「日本語に逃げられない」ということでした。東大では中国人の先生方も日本語が話せるので、中国語での言い方がわからなければ日本語で言うということが可能だったんですけど、南京では街中ではもちろんのこと、授業でもそうはいかないので、自分のできる限りの単語

や文法を駆使して伝えようとするという機会はかなり多かったように思います。3週間という短い期間なので、語彙力が飛躍的に上がったとか、めっちゃ聞き取れるようになったとか、そういうのはなかったんですけど、中国語を話すことに対する抵抗はかなり少なくなったのではないかと思います。ただ、南京に行って改めて感じたのは、1年半中国語をそこそこちゃんと勉強してきても、現地の一般の人々とコミュニケーションを取るには圧倒的に不十分だということです。まず、単語が全然わからないし、話すスピードも早い、発音もなまっていて聞き取りづらいという感じで、言っていることが全然わからず、自分の力不足を痛感させられました。自分はAセメでも中国語の授業を取るつもりだし、もっと中国語の運用能力を上げていきたいと思っているので、今後は語彙とリスニングを特に重点的に取り組もうと思いました。

印藤：良かった点としては、まず第1に、安全に十分に配慮されていた、ということですね。先生がメッセージを送るとすぐに返信してくださったのは、私たちにとって、すごく安心に繋がりましたし、何か不安なことがあったらいつでも聞けるという、聞きやすい体制が整えられていたことが、すごく良かったなっていう風に思っています。

授業については、口語をやりたいという人が、最初に、多かったんですけど、文章語にも、先生が意識的に触れてくださったことによって、両者の使い分けを初めて明確に意識することができたので、口語能力と文章語の能力が、両方上達したんじゃないかという風に思っています。

このようにして実践的な中国語力が身についたことによって、中国の都市での生活の具体的なイメージが、だんだん掴めるようになってきたことによって、今後、中国長期留学をしたいという人にとっては、そういう具体的な道筋が開かれたように感じているので、その点では、第一歩として、非常に有意義な研修だったのではないかという風に思っています。

あと、これはちょっと些細なことではあるかもしれないですけども、参加者の選考が文理にまたがって、いろんな人が来てくださったのが、すごく良かったなっていう風に思っています。途中、企業見学とか、いろんなところがあったんですけども、例えば、歴史が得意な人とか、技術が得意な人とかが、それぞれの感想を言うのが、とても楽しく聞くことができたので。普段、私はTLP文系クラスにいたので、同じような人としか交わらない環境よりも、結構刺激に溢れた中国語学習ができたんじゃないかという風に思っています。あと、これがすごく私にとっては良かったんですけど、宿舎の環境が快適だったのがとても良かったです。前回の研修までは違う宿舎だったという風に聞いているんですけども、今回の宿舎はテレビがついていたりして、非常に収納も多くて、本当に快適に過ごせました。ぐっすり寝られるっていうのが1番良かったですね。これがもし、他の人と同室だったら、途中で体調崩しちゃったかもしれないなっていうのがありまして。そういう点では、1人部屋っていうのはありがたかったです。

反省点としては、ちょっと日本語を使いすぎたように思っています。途中でルワンダ出身の方が教室訪れる機会があったと思うんですけど、その時に、中国語でその人と意思疎通をするのがすごく楽しくて有意義だったように思うので、もし可能であったら、他国の留学生と机を並べて勉強したかったなっていう風には思っています。それで、国際語として

の中国語というのを意識することにも繋がったので。それは本当に、視野を広げる機会でもありましたから、できれば同じ留学生という立場の人と交流する機会があると、とても有意義なんじゃないかという風に思いました。

松浦：僕が感じた良かった点は2点あります。まず、最初にこのサマースクールに参加する時は、知らない人が多いから、どんな感じの研修になるのかなっていう不安が結構ありました。でも、研修が始まったらすぐみんなと仲良くなれて、授業、授業の後の活動とか、街中の観光と、寮での生活とか、そういうのを全部みんなと一緒にやることで、病気になった時の助け合もそうだし、あとは、いろんな情報の共有、このお店がおいしいとか、こういうところに行ったら面白いみたいな情報の共有もできたっていうのも、すごい良かったなと思ってます。それは、一人で南京の街をまわったりとかするよりも、より、経験とか、新しく自分に得られるものを深める、いいきっかけになったなと思ったので、このメンバーで、仲良くなれたのが、すごい良かったなと思ってます。

もう1つ、よかったなと思った点は、現地の人たちと交流する機会がたくさん得られたということです。現地の人っていうと、まず、現地の高校生と、南京の大学生、あとは先生方と、お店の人とか、あとは、先ほど印藤くんが言っていた、違う留学生の人とか、サポートに来てくださった人々とかです。そういう人たちと関わったことで、いい意味で、中国人の人も、意外と日本人と変わらず、優しい、普通の人たちなんだなっていうのもわかったし、それ以外にも、違う点としては、例えば、中国人の高校生が、すごいやる気に満ち溢れてて、学ぶ点が多いとか、刺激がいっぱい得られるとか、そういうの実際に触れ合うことで分かることが多かったのが、すごい良かったなと思います。

自分の反省点としては、中国の授業に関することなんですけど、先生方が積極的に、僕たちが喋るようにアプローチをかけてくれて、どんどん、質問して、答えるようにさせてくれてました。その中で、自分で中国語を発するっていう姿勢は、結構身についたとは思いますが、逆に、自分の意図をちゃんと明確に伝えるためには、それなりの語彙が必要なので、南京に来る前までに、そこまでちゃんとした語彙を身に付けてなかったため、すごい平易な語彙をなんとか駆使して伝えようとしていました。それがもし、中国語の語彙を、もうちょっと暗記できていたら、話す内容に深みを持たせられたりとか、話す練習にもうちょっと繋がったのかなっていうのを思ったので、事前の学習をもう少しするべきだったなっていうのが、1つの反省点でした。

もう1つの反省点は、観光する施設の予約を事前にするべきだったなっていうのなんですけど、これは、男子で南京大虐殺の博物館に行こうと思った時に、あまりにも予約が埋まっていていけなかったということがありました。事前に知ってたら、予約できました。1番行きたいところではあったので、少しそれが残念ではありました。なので、ちゃんとその予約をしてから行くべきだったなっていうのが2つ目の反省点でした。

自身の今後にどのような影響があったのかについては、まず、中国語の重要性に気づけたなっていうのがあります。中国語を喋れないっていう状況と喋れるっていう状況で、本当に、得られるものが全然違うというか。喋れなかったら、いちいち翻訳を使って交流をしないといけないとか、そういう手間もそうだし、伝えたいことも伝えられないし、でも逆

に、中国語喋れるだけで、向こうの人は、この外人の方が中国語を喋ってくれてるっていう、もうそれだけで、少しフランクに接してくれるというのがありますし、中国語だから、中国語を使えるからこそ、自分の本当の意図を伝えられるというのもあると思うので。中国語の重要性が分かったことで、今後の中国語の学習の意欲がすごく上がったっていうのが、まず一点、すごい影響がありました。

次に、中国に3週間近く滞在したことで、中国に対する親近感が湧いたということがあります。生活してるっていうのもあるし、現地の人と交流しているっていうのもあるし、もう本当に中国に溶け込んでいる感じがすごくあったので、そこから中国に対する親近感が湧いて、もっと中国について学びたいとか知りたいとか、中国語を使いこなせるようになりたいっていう思いが強くなりました。

最後に、海外の現地に行くことの大切さを学べたっていうことです。

一番僕が驚いたのは、南京の物価の安さだったんですけど、そういうのは現地に行って食生活をしたりとかじゃないとわからないことだと思うし、あとは、中国人の方が、どういう人間性を持っているのかということもわかりました。とにかく適当だけど、なんとかする人がたくさんいるっていうのが、僕の感想でした。

ただ、すごい丁寧にちゃんとやる人もいるので、色々な人がいたんですけど、そういうのを、目で見て、話してわかったっていうのは、日本にいて、中国について聞いてるだけでは、わからないことだったなという風に思ったので、やっぱり、自分でちゃんと足を運んでいくっていうことの大切さを学べたのがすごくよかったなと思いました。

仲本：まず私がこの南京の研修で学んだこととか得られたことっていうのが主に3つあると思っています。

1つ目はまず間違いなく語学力だと思います。私が南京の研修に参加することを決めた1番の理由が、その会話力、中国語を使った対面でのコミュニケーションをもっとできるようになりたいと思って参加しました。

授業ではその文章を読み書きする方の授業と、会話の授業と2つあったんですけど、その会話の方で特に身近な事柄について話せるようになったかなと思っていて、後半の方で特に伸びが大きかったかなっていう風に思っています。

2つ目が文化についてです。私、中国の大陸の方に初めて行ったんですけど、やっぱり思ったのと全然違って、交通だったり、生活様式だったり、あと人柄だったり、いろんな日本と違う文化を体験できてよかったなと思います。特に食べ物なんですけど、本当に中国の食べ物が美味すぎて、日本に帰ってきてからもしばらくは辛いものが食べたくてしょうがなかったです。

3つ目は、これは南京研修の副産物とも言えるものなのかなって思うんですけど、皆さんと仲良くなれたことです。去年の報告書とか見てると、やっぱりオンライン開催だったからだと思うんですけど、東大生同士の交流が少なかったのがちょっと思い残すところがあるみたいなことが書かれてたんですけど、今回は本当に皆さんと仲良くなれて楽しかったです。

反省点と悲しかったことなんですけど、先ほども言ってくれたように、まず wechat が使えなくなったことです。復旧にあたっては、菊池先生にもご迷惑をおかけしましたし、授業

の宿題提出とかも全部友達から送ってもらったりして、何かと不便がありました。あとは、せっかく高校生、大学生と仲良くなれたのに、連絡先交換できないっていうのもとても残念でした。

wechat の解決方法を一応自分なりに調べたものを皆さんに共有しておく、自分だけでは不可能で、私が菊池先生にお願いしたようにと、使い慣れたる友達が絶対必要らしくて。しかもその友達が長い間 wechat を使っていないといけないという条件があったので、来年以降も同じように wechat を使う予定があるのであれば、事前にみんなで友達追加しておくとか、もうちょっと最初に使い慣れておけば、日本にいる時間だったら、止まっても多分自力で復旧できることもあったかもしれないので、そこはもうちょっとよくできるかなと思います。

2つ目に、自由時間が私はもうちょっと欲しかったです。夜の時間は、門限9時で、そこまで早くなかったかな、安全面との兼ね合いを考えるとしょうがなかったかなって思うんですけど、土日とかにもうちょっと遊びたかったなっていうのが自分の個人的な率直な意見です。ただ、自由時間以外にもたくさんのプログラムを用意してくださっていて、それがすごく学びの多い時間でもあったので、もしまだ余裕があれば、来年度以降、自由時間もうちょっと増やしてほしいなと思いました。

さっきもちょっと言ったんですけど、中国語の伸びについて。3週間のうち、実は3分の2が終わるぐらいまでは、あまり自分の伸びを実感していなくて。あれ、なんか聞いてたのとちょっと違うぞ、みたいな感じで思ってたこともあったんですけど、最後のラストパートの伸びっていうのをすごく感じていて。私が多分このクラスの中で1番中国語力が低かったかなって思って。なので皆さん思わなかったかもしれないんですけど、私的にはちょっと焦っていた部分もあったので。でも、結局、後半は自分の伸びを実感することができたので、来年後輩たちに伝えたいことがあるとすれば、焦らずに最後まで楽しんでほしいなっていうところです。

今後、より良くしてほしいところって言えば、さっき印藤さんも言ってたんですけど、中国以外の外国人と、中国語を使って交流する機会があればなと思いました。私は、夫子廟のところで、南京大学に留学に来ているマリ人の人たちと仲良くなって、楽しかったので。中国語って、ただ隣の国の言語ってだけじゃなくても、もはや国際語、共通語に近い立ち位置を占めていると思っているので、そうやって、中国語の大事さを感じた期間でもあったので、他の外国人と、中国語で会話する機会がもっと増えたらいいかなと思いました。

並木：一番、現地に行けて大きかったのは、現地の人の会話するスピードっていうのを、自分たちで体験できたことかなと思います。普段こっちで授業して、先生方が話してくれているそのスピードとは全然違って、一回、印藤さんと一緒に携帯ショップかなんかで、説明を聞いている時に、ものすごいスピードで話されて、もう1回、もう1回みたいなことがあって。早いのを聞くことによって、スピードに慣れていって、リスニング力が上がるかなっていう、そういう経験になったかなと思います。

あとは、いろんな方と交流していく中で、現地の人が、めちゃくちゃ温かいなっていうのを感じました。それこそ、南京大学の先生方とか、いつ休んでるのかなっていうぐらい、結構ついてきてくださったと思いますし、お店の人とか、すごく優しくかったりしたので、僕たちに対する熱心さを感じられて良かったなと思います。

交流の中で、色々、日本のことを聞かれたんですけど、普段、自分の国の文化とか、習慣を意識することがあんまりないので、いい機会になったと思うし、それをまた中国語で、相手に伝えるっていう経験も、すごい貴重だったなと思います。

あとは、具体的な生活の中で経験したことなんですけど、アリペイがすごい発達してて、アプリ1つで、支払いだったり、地下鉄、バスも乗れますし、タクシーも呼んだりして、あと、自転車は、めちゃくちゃ借りたんですけど、あと、出前とか映画のチケットまで予約したので、アプリ1つで、ものすごい便利になってるなと感じました。逆に、アリペイに頼りきってたので、洗濯とかちょっと危なかったなと思います。現金を使わないところで、ちょっと不便さを感じました。あと、物価は、本当に、日本に比べると桁違いに安くて驚きました。

ちょっとこれはいい経験かわからないんですけど、仙林のキャンパスに行った時に、校門のところで、車と電動バイクが事故を起こして、ちょっとびっくりしたんですけど、その後の対応が、バイクの人が、逆に車の運転手に大丈夫かって聞いてて、それで、大丈夫大丈夫って言って、そのまま解散してしまったので、その対応の軽さというのが、ちょっと面白かったです。

その後に、仙林湖っていう、大学からちょっと離れたところにある湖に行ったんですけど、そこで散歩してる人が原発の処理水の話をしていて、ちょっとびっくりしましたし、逆にちょっとした国際問題が発生してる時に現地に行けたっていう経験ができたのもちょっと面白かったです。

反省点はちょっと、男子みんな、何かしら体調不良があった気がします。原因としては、多分体力的にきつかったのかなというところがあったのかなと思います。なので、適度に休むっていうのが、ちょっと足りなかったのかなと思いました。

あとは、高校生の交流の時に、クイズとかは最初に準備できて、割とスムーズに行けた気がしますけど、それ以外の具体的な流れっていうのが、事前情報が少なく、事前の東大の紹介の準備とかが慌しかったり、高校についてからも色々バタバタしたので、来年もし交流するなら、できる範囲で早めに情報を共有してもらって、事前準備をしっかり進めておくのが大事かなと思います。

あとは、松浦と同じなんですけど、南京大虐殺のその記念館にいけなかったことがめっちゃ反省点で、そこも事前に予約の情報とか押さえといて、行きたいところに行けないっていうのが1番悔しいと思うので、そこをしっかりしておけばよかったなと思いました。

木村：良かったこととしては、まず1つ目は、現地に行って、実際に中国の生活とか文化とかを体験できたことが1番大きかったかなと思います。現地で、街を歩いている中で、街中に、こんなにいろんなところに標語があるんだっていうこととか、バイクがすごく多かったり、信号がない道が多かったりするっていう、交通面とか、実際にそういうのは自分で現地に行かないとわからないことだと思うので、本当に今回渡航できてよかったなと思っています。

2つ目は、中国語をもっと勉強しようっていうモチベーションが生まれたところかなと思っています。午前中の中国語の授業で、特に会話の授業だったんですけど、自分たちが今まで知らなかった単語とか熟語とかがたくさん出てきたり、同じ言い方でも、もっとレベル

の高いというか、洗練された、ネイティブが使うのに近い言い方を教えてもらったりして。1年半、中国語を勉強してきても、まだ単語とかは初級レベルにあるっていうのをすごく実感したので、今後は、語彙力をもっと上げて、初級から中級、上級へと、中国語力を上げていければいいなと思っています。

あとは、午後は結構、自由時間も多かったと思うので、そこで、みんなといろんな場所に行けたり、宿舎で3週間ずっとみんなと一緒に過ごせたことで、みんなとの仲を深められたこともよかったと思います。

あとは、事前に説明会でいろんな情報を伝えてくださって、例えば、水道水を飲まないとか、カットフルーツを食べないとか、そういう安全面で気をつけることをたくさん教えていただいたので、現地でもちゃんとそれに気をつけて、薬を色々持っていったんですけど、結局何も使わずに健康に過ごせたのが良かったなと、個人的には思っています。

あともう1つは、事前に、自主ゼミをやっていて、南京の自然とか、地理とか歴史とかについて、それぞれ担当を決めて、調べたことを共有していたんですけど、そこで私は、中国の清朝末期から中華民国初期の歴史を調べて、世界史でやった記憶はあったんですけど、ほぼ忘れていたので、そういうのをもう1回調べて知識を入れていたことで、現地に行った時に、例えば、中山陵の孫文の記念館に行った時に、すごく、興味深く回れたっていうのがあって、やっぱり事前学習はとても大事だなと思いました。

反省点としては、1つ目は、高校生と交流する機会があったと思うんですけど、そこで私が交流した班の人たちがみんな日本語がすごく上手で、最初に向こうから日本語で話しかけられたので、そのままずっと日本語で喋ってしまって。なので、もうちょっとそこでも中国語を使って交流できたら良かったなっていうのがあります。あともう1つは、理由はよくわからないんですけど、私はアリペイも wechatpay も現地で使えなくて、ほぼ現金での生活になってしまって。皆さんにアリペイとかで毎回払ってもらってご迷惑おかけしたので、申し訳なく思っています。現地で何が起こるかわからないので、現金を一応両替はしていたんですけど、途中で足りなくなって銀行で両替することになってしまったので、アリペイとかが使えたら大丈夫だとは思いますが、一応3週間で使う分の現金を事前に両替しておいたらよかったのかなと思いました。

韓：まずは、数年ぶりに現地に渡航して、南京サマースクールっていう交流プロジェクトに参加することができて、本当に私たちは運に恵まれていたなと思うと同時に、事前の説明会で伊藤先生がおっしゃっていたように、この南京大学と東京大学との交流における、今回の南京サマースクールがすごい大事な節目になっているっていうふうにおっしゃっていたので、いろんな意味で重要な意義を持った、交流プロジェクトに携わることができて、すごく光栄に思います。

あとは、南京大学と東京大学の関係者の皆様で、今回、企画とか運営とかしてくださった、責任者の皆様に、本当にすごく感謝しています。例年よりは人数が減ったとはいえ、この3週間の濃密なスケジュールを組むのってすごく大変だったと思います。本当にありがとうございました。

特に良かった点としては、まずは、平日の午前にあった中国語の授業で、王老師と、汪老師がいたと思うんですけど、本当にお二方とも、今までの学校の授業ではなかなか体験できなかった、先生方との近い距離感とか、授業の垣根を越えて、普段からすごい親身になってくださったと思うし、

授業の、精読とか、会話とか、そういう枠を超えて、色々、週末はどこに行ったんですかとか、おすすめの場所とか、そういうのを色々話してくださったっていうところで、先生というより、ちょっと不適切かもしれないんですけど、結構友達に近い感覚で、でも、授業の時はちゃんと、気を引き締めて取り組むことができたので、すごい有意義な授業に参加できて、すごく嬉しく思います。

あとは、何人が言及していた気がするんですけど、中国語力が、私は、自分は逆に下がった気もしたんですけど、特に、普段一緒に行動していた女子勢のみんなは、本当にすごい、中国語がどんどん上達してるなって思って。何分間か発表するっていう機会が、何回か設けられていたんですけど、回を重ねるごとに、みんなの文章の構成とか、長さだけじゃなくて、語彙力とか使う文法事項とか、どんどん洗練されてるなっていう印象を受けたので、やっぱりみんな、どんどん上達してるなって思って、自分も結構頑張らないとなっていく焦りも感じる事ができたので。こういう、3週間みっちり中国語を浴びて、切磋琢磨できる環境っていうのは、すごく貴重だなと思いました。

授業のことで言うと、先ほど、伊藤先生が、今年は、例年の20人とかっていう人数とは違って、9名っていう、ちょっと小規模な参加者になっているっていう風におっしゃっていたと思うんですけど、それによって、元々決まっていた授業内でのクラス分けっていうのがなくなって、9人全員で一緒に同じ授業を受けるっていう形になったので、私的には、結果論なんですけど、そっちの方が、みんなとの仲も深めることができたし、9人の中で変な壁もなくなって、同じクラスで一丸となって勉学に励むことができたので、そっちの方が良かったのかなとも思いました。悪い点もあったかもしれないんですけど、9人で参加っていうのも、すごい、いい点もあったなと思います。

生活の方面で言うと、私含めて、実家暮らしの人が、結構多く参加していたと思うんですけど、特に、私は、普段から、やっぱり、親に頼っていたなって思うところもあって、洗濯とか、部屋の掃除とか、就寝時間とか、起床時間とか。生活能力の低さを実感できたと同時に、逆にアリペイを使って、車を手配したり、地図を見て行き先を決めたりっていう、基本的なことだと思うんですけど普段、意外とやってこなかったところを鍛えることができたと思うので、しかも海外でだったので、生活能力が上がったところはあるのかなと信じたいです。あとは、何人か、アリペイとかwechatpayの話をしていたと思うんですけど、私は逆に、途中からアリペイが使えるようになったんですけど、最初は、あんまり使わなくて、現金だけにしようって決めてたんですけど、一回アリペイを使うと、本当にすごい便利だなって思って。人に送ることもできたので、割り勘とかでも、すごい使えるなって思ったので、アリペイがこんなにまたたく間に普及していった理由も頷けるなと思いました。

反省点は、一つは、印藤さんもおっしゃってたと思うんですけど、日本語を話す時間のほうが長かったのかなっていうくらい、あんまり中国語を話していなかったかな、という風に自覚があります。

自由時間は、結構楽しかったんですけど、やっぱり気が緩んで、みんなと日本語でワイワイしちゃったので、そこで積極的に、何フレーズかだけでもいいので、中国語とか挟みながら交流できたら、常に適度な緊張感を持って臨めたかなと思います。あとは、私もなんですけど、体調を崩した人が、結構いたかなってところです。私の場合は、普通に自分の管理意識の低さによるものなので、自分を責めるほかないんですけど、一応異国の地ということで、食べるものとか、生活習慣とか、色々、身の回りのものが、普段と違うので、その辺の意識をもっと強化して臨みたかったかなと思います。

今後への展望に関する事で言うと、1つは、中国語に関するものだったら、自分の発音と、話すスピードの遅さとか、出てこないところとか、やっぱり、まだまだだなんて思うと同時に、あとは、現地の人、ネイティブスピーカーの話す中国語のスピードが、方言が混ざっていることもあったりもしたんですけど、やっぱり結構早いなって思ったり、あとは、日常会話以外の、例えば、総統府の見学とか、中山陵の見学とかで耳につけてたガイドみたいな、あれは日本語だったかもしれないんですけど、中国語で、文語的なところとか、難しい単語とかをたくさん使われると、やっぱり、聞くだけだとパッと意味が把握しづらいなって思ったので、話し言葉以外のリスニング力も鍛えたいなと思いました。発音とかリスニング力とか、どちらも含めて、今後も hsk の受験とか、いろんな方法で、いろんな形で、中国語の勉強をまだまだ続けていきたいなと思いました。

最後に、今後参加していく後輩たちとか、あとは、参加を迷っている人とか、そういう人がいたら、ぜひ、参加してほしいなと思うし、もし参加することになったら、中国の文化を吸収していくとか、中国語を高めていくっていうのももちろんだし、あとは、あくまでも、世界における中国として、隣国である私たちが住んでいる日本との対比も忘れないでほしいなと思います。

生活習慣とか、現地の人たちの大まかな態度とか、交通様式とか、食べるものとか、いろんな点で日本と対比できるところがあるなと思うので、そういうのを意識しながら、3週間の南京を楽しんでもらえたらなと思います。

飯田：まずは、貴重な経験を本当にありがとうございました。私は、文化、中国語のモチベーション、そして反省点の順番で3つお話ししようと思います。

まず、文化に関しては、授業内で言うのであれば、本当にプレゼンの宿題によっていろんな学びがあったと思います。プレゼンでは、例えば中国であるオンラインショッピングのプラットフォームについて調べてくださいとか、あとは中国で制服を探してプレゼンテーションしてくださいっていうものがあって、量は多かったんですけど、本当に勉強になりました。現地にいるからこそ、言葉とか決まり文句をあそこの看板に書いてあるって言って見つけたりできますし、オンラインショッピングに関しても、実際にダウンロードしてみたりという風に、本当に調べ学習がしやすかったと思います。

文化に関して2点目は、中国ならではだなんて思ったのが、細かいことまで本当に丁寧にしていること、努力量が多いことだと思いました。南京大学の方々が、私たちを本当に丁寧にもてなしてくださったっていう言い方でまとめることもできるのかもしれないんですけど、本当に細かいことまで気をつけるんだなって感じたことが本当に多々ありました。例えば、中山陵見学の時に、熱いからってということで、助手の方が、藿香正气散っていう

ものを持ってきてくださいまして。本当に効果があって生き返りましたし、中国ってこういうものがあるんだっていう驚きにもなって、本当によかったです。他にも、授業の準備とか作り込みの量が本当にすごかったですし、南京サマースクールで扱った課題文でも、勉強とか努力を促すスピーチが使われていて、本当に努力をする国なんだなっていうのを私は感じました。

中国語のモチベーションについてなんですけど、私自身は、2Sまでの授業では、南京サマースクールでしっかり中国語を話すっていうのが目標でした。だけどその目標を達成できてみて、サマースクールが終わってみると、また新しい目標というか、モチベーションがさらに上がっていました。なんでかと言うと、中国語が自分にとってただの言語じゃなくて、自分の一部になっちゃったからです。もう現地にはTAさんを始めとする友達がいるので、3週間一緒に勉強して、これからも勉強するであろう仲間もここにいて、本当に一体感ができてると思います。

あと、個人的な話になっちゃうんですけど、中国の映画が本当に面白くてですね、ハマって、最近中国語で書かれてる映画雑誌を買いました。最近もまだ読んでいます。あとは、小红书が本当に便利で、日本の旅行でもまだ使ってます。なんか本当に10%ぐらい中国人になっちゃったのかもしれないです。

反省点の1個目は、韓さんもちよっとおっしゃってたんですけど、リスニング力を鍛えてから行くべきだったなって本当に思っています。博物館とか名所とかだと、ガイドさんとか音声ガイドがあったんですけど、私にとっては本当に早いし難しいし、周りも本当に人が多くてうるさいので、かなり聞き取りが困難でした。諦めて意味もわかんないままシャドーイングしたりとか、他の人に頼ったこともあったんですけど、自分で聞き取れていたら、本当に面白かったんだろうと思っています。

スピーキングが南京に行く前にできてなくても、現地で練習する機会はあるんですけど、リスニングはできた方が現地での体験が豊かになると思いますし、相手が言ってることを聞き取れて初めて自分で話すスピーキングが始まるので、やっぱりリスニングは行く前にやるべきだと思います。

個人的には選抜試験のリスニングが本当に難しくて、それはそういう意味があったのかなって勝手に今は解釈をしています。

反省点の2個目は生活面に関してです。疲労もあると思うんですけど、一つ、数人の体調不良の原因かもしれないって思ってるのが、四川料理です。

行ってから8日目ぐらいに、たまたま通りかかった店が本当に辛そうじゃなかったんですけど、実は四川料理で。辛そうじゃなかったんですよ。でもそれを食べた後からきつそうな人が数人出た印象があります。行ってからすぐは食べなかったですし気を付けたんですけど、それ以上に警戒が必要で、辛そうじゃなくても、微辣でも、周りの中国人が普通の表情で食べてても安心はできないんだなって思いました。あとは辛ければ無理して食べないのが大事だと本当に思いました。体調を崩すと本当にもったいないと思います。

以上です。本当にありがとうございました。

伊藤先生：それでは、いくつか、1人1人になっちゃうけど、質問させてください。

まず、寺嶋さん。他の人も何人かいたんだけど、wechat が使えなくなったっていうのは、それはなんか理由とか原因とかはわかっている？

寺嶋：多くの人に異常な挨拶を送っているんで、ban されましたみたいな。誰にも送っていないんですけども。飛行機が着陸して、スマホつけたらそうだったんで、ちょっともうよくわからないんです。

白先生：おそらく wechat は色々監視されてる中で、学生の皆さんの場合は一斉に wechat を申請したばかりの上、プラスグループの中で一斉に全員に送ってるから、いろんな人に繋がってるというのが怪しまれたらしくて、それで使えなくなっちゃったというのがあるんで、その中で、3 人ともちょっと試してみたというのはあるんだけど、wechat を使えなくなった状況から使えるようにするという方法として、私もそれ事前に、把握していればよかったんですけども、そういうのわからなかったんで、注意事項としては、事前に連絡しなかったというのがあるんですけど、それが私の反省点になります。

救済方法として、友達になってる人というのは、6 か月以上使っている人じゃないと、救済できないし、プラス、銀行とか自分のクレジットカードとかと、繋いでるんでしたらまだ良かったんですけども、そういうのがなかったら、友達も救済できないということなんで、そういう救済方法は見つからなかったということです。今後、できたらなんですけれども、みんなに、もうちょっと事前に、選抜されてもう行くよという時点で wechat を申請してもらおうとか、あと、グループの中で、東京にいる間でも色々話し合うとか、引率の先生たちは使用歴があるので、個人的に友達になってくるとかの場合は、もし大陸に行った時にできなくなったとしても、一応救済方法として考えられるんじゃないかなと思うんですけれども。

使えなくなったその 3 人は、たまたま私と個人的な連絡というのはなくて、グループで直接連絡してたというのがあるので、今後、wechat を使う上で気を付ける、連絡事項として事前に話しておきます。

伊藤先生：これは 松浦さんとか何人かが言ってましたけど、物価がものすごく安いと感じたということは、割と皆さんが、庶民的なところばかり行って買い物とかして、ホテルとか、そういうハイソなところはあんまり行かなかった。

松浦：そうですね、それもあります。学生が行くようなところばかりだったんで、そもそも安いっていうのもあったんですけど、でも全体的に、日本と中国で物価が安いものも、そもそも違ったりとかして、デザートとかは高かったりとか、そういう違いはあったりしたんですけど、でも、日常生活に必要なものは全部安かったっていう。

伊藤先生：なるほど、わかりました。上海とか北京の、都会のハイソなところはめちゃくちゃ高くて、部屋代とかも、家の値段なんかもそうですけど、そういったことがよく言われてる割には、中国社会って、安い、庶民向けのものもだいぶ保存されていて、安く生きていくための、そういったものも一応揃ってるってことですね。南京も、超メガシティではないけども、一応、大都市だから、ハイソなところは高いのかなと思ってたんで、そんなことはないってことだよな。

それから、並木さんが仙林湖に行って、原発処理水の話をして、誰かがしていたってというのはどういうことなのかな。

並木：通りすがりの中年の女性だったんですけど、集団で散歩か何かをしていて、声が割と大きいので、内容が全部聞こえたんですけど。そういう類のことを言っていました。

伊藤先生：中国人同士の間でわあわあと言ってたよ。

並木：日本が汚染水を排出してるらしいよっていう内容のことを、仲間うちで。

伊藤先生：並木さんに、こいつは日本人だからって、文句言ったっていうんじゃないんだね。

並木：はい、それで大丈夫です。

伊藤先生：ありがとうございます。それから、あと1つは、これは最初から wechat のやり取り見てて、なんでかなと思ってたんだけど、朝食がお弁当だったんだよね。毎朝それが届けられていて、韓さんだったかな、それがありがたくも弁当届けてもらったみたいなこと言われてたけど、一応、僕ら側からすると、朝食付きの宿のプランのつもりなので、朝食ついてるのは当たり前っていうか。

2019年の時に、18年もそうだったかな、ちょっと別の、まあホテルみたいなところだったけど、あそこはバイキング方式で、もう中国人と一緒に取り合いしながら朝食をするみたいな感じだったんだけど、それがそういう風な形ではなかったわけだよな。それは、なんでそうなったのかなと思ってね。

伊藤先生：あと、それから、他の国の留学生との交流もあればよかったっていう意見があったんだけど、あそこ、留学生寮だよな。他の国の留学生とかは、普通にいなかった？

菊池先生：いました。いましたけど、やっぱり今は、もうかなり少ないらしいです。それでもだいぶ戻ってきたそうなのですけど。アメリカ人とかは、ほとんど戻ってきてないという。

伊藤先生：あ、それは言ってた。全部もう、200人ぐらいいたアメリカ人留学生が全部引き上げたって言われてて、朱さんが言ってたよね、確か。

菊池先生：街の中でも全然外国人を見かけませんでした。

寺嶋：そしたら、皆があげてくれた反省点について色々ざっくばらんに話していけたらなと思います。

まず、wechatpayについては、洗濯機とか、もし使えなかったらどうなっていたんだってことは、何人か触れてたと思うのですけど、これはどうですかね。

印藤：初回か2回目の説明会の時に、全員wechatpayの方まで開通するようにしとけば、多分問題はなかったのかなという風には思います。というのが、私が途中までwechatpayが使えなかった原因は、実名登録を間違えて、15日間その情報を直すのができないっていう風な連絡が来ていたので、少なくとも渡航の15日前以前には申請をした方がいいという知見はありました。

仲本：wechatpayって全員できるものなんですか。私が調べた感じだと、中国の電話番号がどうのこうのととか、中国の口座が必要だとか、そういう説明もちょっと見て。認識の中ではアリペイとwechatpayどちらかが使えればいいと思ってたので、アリペイだけを登録したんですけど、実際wechatpayって使えるんですか。

印藤：wechatpayが日本人向けに解放されたのが2023年の7月だったので、もう直前だったんです。なので、その情報をいち早く見て登録してれば、もしかしたら間に合ったかもしれないですけど、まあまあ、今回に限ってはできなくてもしょうがないかなっていう感じはします。来年以降もどんどん変わってくると思うので、その最新情報も常にリサーチしてもらえないのかなっていう風に思います、来年以降の人にとっては。

寺嶋：wechatpayあと使えたのが飯田さん、は中国の電話番号か何か持ってたわけではない？

飯田：ではなくて、なんでやったんだろう。ちょっと覚えてないんですけどなぜか使えました。でも私、本当に思うのは、木村さんもアリペイが急に使えなくなったって話をしている、中国にいると本当に急に何が使えなくなるかわからないので、何が起こるかわからないって思っておくこと自体が大事かなって思ってます。

寺嶋：そうですね。やっぱり wechatpay しかり、アリペイしかり、複数人で行ってるからこそ助け合えたっていうところはありますけど、突発的な事態を考えておく必要はやっぱりあるかなという風に思います。

たくさんの方があげてたこととしては、体調不良になりやすかったっていうのと、あともう一つ、多くの方が挙げてたこととして、自由時間が少なかったってことが、あるかなと思うんですけども、やっぱり、自由時間、色々観光したいってことがあると思うので、多分いくらあっても、ちょっと足りないとか、なるべく、色々なところ見て回りたいから、ギリギリまで外出歩いて、体調不良ってことになりやすかったってこともあると思うんですけど、これについてどうですかね。

仲本：自由時間は少なくとも、今回はコロナのせいで門限が厳しかったっていうのがあると思うんですけど、それはとっても賛成で、多分例年より早く設定されてたかなとは思いますが、これ以上遅くなると、こっちとしても遊びたいけど心配だっていう思いがあるんで、来年度以降も9時に門限を設定するっていうのは悪いことじゃない思っています。ただ、例えば午後のプログラムをなるべく早い時間に詰めて、後ろをもうちょっと開けてもらうとか、そういうところで、もうちょっと自由時間、確保できる余地はあったかなと思いました。

寺嶋：自由時間っていうと、午後の文化体験活動が終わって門限までっていう自由時間もそうだし、あと、土日みたいな、丸1日確保されてるってところもあると思うんですけど、特に、丸1日の数がそんなに多くないので、ちょっと疲れたかなと思っても、やっぱり色々、じっくり遠くまで見て回りたいってことで、休むか、遠くまで行くかってことで考えた人も多いんじゃないかなと思うんですけど、松浦さんとかどうですか。

松浦：僕、一個、それに関して先生方に聞いたかったのが、現地の高校生の方に、南京は夜はすごい安全で、あと、夜になると、人が出てきてダンスを踊ったりとか、あとは屋台が出てきたりして、結構、夜の方が面白い面もあるみたいなのを、聞いたんですよ。もしそうなのだとしたら、少し、安全を確保した上で、夜の街を歩いてみるっていうのもありだったのかなと思ったんですけど、そういうのっていうのは、実際はどうなんですか。

伊藤先生：一応、僕の認識は、まあ、大体、平均的に言うならば、日本と一緒ぐらいと考えてもいいような。南京は特にそうなんじゃないですかね。僕もあんまり知らなかったんだけど、夜の繁華街みたいなどこもあるんだよね、あんまり皆さんには勧められない、それは。お酒のところだから、基本的に。バーとかね。

かなり凝った、昔の、ちょっと古いレンガ作りの建物を利用した、ちょっとした夜の観光スポットみたいのがあるんですよ。で、そこは、実は僕は、皆さんとちょっと別行動だったから、行ったんですね。非常に、それは安全だったと思います。ただ、やっぱ、そこは、ナイトライフっていうやつですよ、一応ね、基本的に。

で、そういうところほど、何が起こるかかわからないっていう、リスクは増える。で、実際にそこに行った時も、かなりしつこい客引が、まあ日本にはいますけども、いて、もちろん、ついていかなかったんで、どうなるかわかりませんが、ちょっとそこは、我々としては、教員側としては、やや、自由化するのにはちょっと躊躇されるという感じですね、もちろん、体験としては、非常に、安全であれば、いい体験になると思いますが、それに関しては、これはもうちょっと、僕の感想というか、考えだけど、それは、サマースクールではやめてほしいと。

一応、国際研修ってのは、皆さんの国際的な活動、それからいろんな国際的な関係の中でいろんな事業をやっていくですね、学生として、あるいは、社会人になった後で、そういった方向へ進んでいくためのまず第一歩の窓口というのかな、インターフェイスみたいなものとしてね、学生さんに利用、活用してほしいっていうことでやっていて、学校が、一応責任を持ってこれやってる以上は、ちょっと事故は起こせないですよ。

皆さん、もう多分、中学、高校の修学旅行なんかでも体験してきたと思うけど、まあ、よく似たもんなんです。問題が起こると、大変なことになるんです、引率側は。大学の方の企画側も色々責任問われたりして、最悪の場合、この企画はもう来年以降できませんみたいな、最悪の事態も、ちょっとやっぱ、チラチラと頭をかすめるんですよ。今回もちょっと最初の方から、僕は言っちゃいましたけども、もうなるべく活動は自重してくださいということを書いてきて、まあ、教育としてはね、リスクに？にして、何もやらないっていう風に突っ込んで欲しくはないんですね。これは東大の教育方針としても、なるべくいろんな体験をしてもらいたい、勇気を持っていろんなことやってもらいたいっていうことでやってますよ、東大全体もね。

で、僕もそうですけど、ただ、このサマースクールっていうのは、これは国際研修として、科目としてあって、やっぱそういう、その方向へ行くための、1歩目のワンステップ目の体験として活用してほしい。で、その中で、やっぱそういう機会っていうのは、今後の後輩の皆さんにもずっと提供したい、そのためには絶対に問題起こさないっていうですね、ここはもうちょっと、本当に皆さんの自由時間もっとほしいっていう気持ちとぶつかっちゃうんですけど、そこはちょっとご理解いただきたいというのが、私の本音です。多分、菊池先生とかも一緒だと思いますけど。

寺嶋：ありがとうございます。自由時間の話に関連して、木村さん、すごい元気いっぱい過ぎてたみたいなお話だったと思うんですけども、もうちょっと自由な時間があつたら、ちょっと休みたかったとか、そういうことなく満喫できた十分な時間があつたとか、どうですか。

木村：私は個人的には、自由時間はある程度あって、そんなに少ないとはあまり感じなかったんですけど、確かにもう少しあったら、休日に、午前中はゆっくりして、午後から活動を始めるとかいうことをもう少しできて、みんな体調管理もしやすかったんじゃないかなとは思いますが。

寺嶋：そうですね。結構みんな土日でも出歩いて、月曜の午前の授業から「疲れた」みたいな感じが漂ってたのはすごいよく覚えてますね。男子たちは男子たちで、結構よく出歩いてたんですけども、女子たち観光もそうですね、映画にすごい回数行っていたような感じがあるんですけど、韓さんとか十分観光できた感じですか。

韓：はい。最後の方にちゃんと老門東とかも行けたので。中山陵の隣の世界遺産の明孝陵、あそこに行けなかったくらいで、他は特に遺憾はないんですけど、でも、自由時間が少なかったっていうよりも、自由に過ごせる自由時間が少なかったなっていう印象で、20日あたりの日曜日とかは、翌日の田家柄高中との交流の準備で、スライドとか、東大の紹介とかを、結構急な感じだったのもあって、日曜を潰して、みんなで西苑の1階で、今ではもういい思い出なんですけど、準備したりとか、あとは、宿題も少なくなかったので、自由時間っていう名目の時間は、結構、自由には過ごせないところもあったかなとは思いますが。でも、スケジュール上での自由時間は、結構、自分にはあったのかなと思います。

飯田：そうですね、高校との交流のスライドとかの準備は、行く前にやっというたらよかったのかなって、今は思ったりします。

寺嶋：そうですね、そういう交流とかの事前情報は、もうちょっと事前に確認した上で準備していきかけたなっていうのはあるかなと思いますかね。僕はクイズの準備担当したんですけど、それも結構ギリギリになってしまったのは申し訳なかったんですけど、そういう東大の紹介とかがあるってことを知ったのが、3、4日前とかだったので、もうちょっと確認したかったなっていうことはありますかね。複数人があげたこととしてはそれぐらいなんですけれども、何か他に話しておきたいこととかある人はいますか。

仲本：時間ちょっと押しちゃってて申し訳ないんですけど、皆さんに一個聞きたくて、今回、元々2クラスの前定が人数減った都合で1クラスになって、そのせいで、一長一短あ

ったかなと思ってるんですけど、次回以降もしこの感じの人数とか、もうちょっと多め、12人とかになった時に、皆さんは1クラス派ですか。それとも2クラス派ですか。再考の余地があるかなと思ったんで、皆さんの意見聞きたいなと思います。

寺嶋：個人的には、TLPじゃなかったんで、ほぼ、1、2回会ったぐらいで、実質打ち解けたのは、南京に来てからというか、最初の、成田空港というか、だったので、もし、例年の20人ぐらいの人数がいて、2クラスっていうことだったら、全員とここまで親しくなれたかっていうのは、ちょっと、よくわからないところはあるかなと思います。

並木：仲を深めたいのなら、1クラスの方が絶対いいのかなと思うし、レベル別に分けるのも、ずっと、わかんないことを言われてて、全然わかんなくて、ついていけないってなるのもあれなので。

でも、今回の感じだと、別に、そんな能力に差があったわけでもなかった気がするんで、1クラスでいいんじゃないかな、と思います。

菊池先生：ごめんなさいね。その話なんですけど、皆さんのご意見は、色々、今出してもらって、すごく参考になりました。伊藤先生にお伝えいただいてよかったなと思うんですけど、費用の問題と、あと、先方の人員の問題、いろんな問題があって、1クラスか2クラスにするかっていうのを動くんで、多分、学生さんの意向でちょっと動かせる問題ではないかと思います。

仲本：ありがとうございます。いや、私的には、今回1クラスで9人で仲良くなれてすごい良かったんですけど、私がクラスを下の方に引っ張っていた自覚があって。最初の方で間違える恥ずかしさを捨ててしまったので、もう積極的に、本当にもうバカ丸出しで質問ばっかしてたんですけど、そのせいでできる方たちにはちょっと物足りない授業をさせてしまったかなと思って申し訳なかったんですけど、まあ、南京大学の意向で1クラスっていうことなら、よしとしてください。

菊池先生：仲本さん、そんなに言わなくても大丈夫ですよ。

寺嶋：ありがとうございます。そうですね、色々1クラス2クラスは都合じゃどうにもできないところはありますけど、結果的に1クラスで良かったっていう人が多数派なんじゃないかなと。結果的に授業もすごい充実してましたけど、そこまで難しすぎるってこともなかったと思います。先生方もすごい標準語で平易な表現たくさん使ってくくださったので、

むしろ午後の講演とかよりは理解できたんじゃないかなっていう風に思います。他に誰かのコメントで気になるところがあったとか、そういうことありますか。

松浦：一個、来年来る人のためにちょっと言っとくとしたら、今回、並木とか、印藤くんが中国の電話番号持ってたのがすごい助かったなと思って、タクシー呼ぶ時もそうですし、あとデリバリーもだし、何かしら、認証するとかになった時に、なんやかんや中国の電話番号ないと困ったので、結構それ助けられたし、なかったらすごい困ってたと思うので、来年来る人は、そういうの持ってる人が1人でもいるといいと思います。

寺嶋：そうですね、よくよく考えると、電話番号持ってる人がもしいなかったら、タクシーも呼べなかったですし、宅配、タオバオとかも、ああいうのも全部、電話番号を求められるみたいなのもありましたし、それよりも身近なところで行くと、お店の注文とかも時々電話番号を求められたりとかで、結局電話番号を持ってる印藤さんとか並木さんしか頼めないとか、そういうことがよくあったので、事前に、全員じゃなくてもいいと思いますが、中国で使える電話番号を持っておくといいかなっていう風に思います。玄武湖とかに入るとき、無料のチケットなのに電話番号いれないと入れないとかですごい困ったような記憶があるので、気を付けた方がいいかなっていう風に思います。

仲本：施設への入場の際してなんですけど、南京大学のこの生徒証では、学割使えないところが結構多くて、なので事前に告知していただけたらいいかなと思いました。私、動物園行った時、学割でお願いしたかったんですけど、こっちも東大の方（学生証）もダメで、結局、普通料金で入ったんで、全部の施設そうじゃないかもしれないですけど、そういうこともあるっていうのを知っておきたかったなって。

寺嶋：向こうだと、学生証はなんか生徒手帳みたいな（しっかりした）もので、カード、これ学生証じゃないよみたいな感じで突き返されたってというような感じだったので。

伊藤先生：予約なんかも電話番号言ったりするんじゃない？

寺嶋：結構求められるところがあります。

伊藤先生：それから、南京虐殺記念館なんか、あそこはもう本当にすごい観光地になってるよね。すごい長蛇の列で入ってるような状態だったんじゃないですかね、多分ね。もしかしたら予約できたとしても、もっと、1ヶ月後とか、そんなになってた可能性はあるかもなと思いました。

寺嶋：他に何か言っておきたいことができた方がいなければ、締める方向に進んでいきたいと思うんですけども、大丈夫そうですか。
今日は本当にありがとうございました。

伊藤先生：皆さんも、本当は対面でできればよかったんですけども、なかなか、本当に時間合わせるのはね、今はたった 11 人と言っても、なかなか合わせられないんで、こういう形になりましたけれども。

皆さん、今後も中国語を続けていきたいというモチベーションも上がったって、もう非常に心強い。ぜひぜひ続けていっていただきたいなと思います。

白先生と菊池先生は今後も EAA 関係がありますけどね。中国語で行う授業とか、それから中級、上級の中国語なんかもやるので、駒場を離れちゃう人もいませんけども、来れる人ですね、今はオンラインじゃなくて対面授業ばかりになっちゃって、本郷に行っちゃうと、駒場の授業ってなかなか受けにくくなっちゃいますけども、本郷にもちょっとはあると思うんでね。

それから、授業に限らず、大学外にもいろんな教室とかあるので。それから、割ともうよくできる人がいるから、wechat の中で、白先生にだいぶ前に紹介されたやつだったかな、故事 FM っていうね、僕、今も愛用してますけども、あれなんかで、中国人の生の声が聞けて、かつちゃんと中身のある話で、文字起こしも分かれていてっていうのがあったりするんで、そういったもの使うといくらでも。初級って言うてる人いたけど、多分中級になってると思います、客観的に見ても。それが、中級の上部、そして上級の方に、どんどんとやっていけばやっていくほど進めていけると思うので、ぜひぜひ続けて頑張っていってほしいと思います。どうもありがとうございました。

録音文字起こし・木村 眞子

おわりに

流動化し断片化する世界の中で

伊藤 徳也

企画者として今年ほど疲弊した年はこれまで一度もなかった。久しぶりの学生派遣をめぐって、難しい判断と煩瑣な処理に追われた。コロナ禍が明けたあと、東大は対面授業を原則とし、特別な場合以外オンライン授業を認めなくなった。国際研修科目であるサマースクールも渡航が前提となった。しかし、東大と教養学部の方針がそのように固まった頃、中国はまだゼロコロナ政策を継続させていた。昨年末に劇的な変化が起こり現在に至っているが、現在のような日中間の往来が可能になるまでには私たちスタッフを困惑させるに十分な紆余曲折があった。私たちは1月頃からサマースクール直前まで約半年に渡って右往左往させられた。昨年の今の時点で、十分警戒はしていたが、その半年間の日中両政府の出入国管理、航空各社のフライト計画及びチケット代等の変化は予測が全く不可能だった。一方、こちらの予算や日程上の条件に融通がきく余地は極めて少なかった。様々な困難を乗り越えて実施したサマースクールが8月に予定通り無事終り、参加者の充実した報告を読んで、いま本当に報われた思いがしている。

今年のサマースクールで最も高いレベルで私たちが悩み心配したのは、いわゆる「反スパイ法」に代表される中国政府特に現地の政府及び公安による監視・管理であった。以前から、学生を連れて行くことに対するだけではなく、中国に渡航すること自体に懸念を示す声が、私のごく身近なところから複数聞こえていた。折悪しくサマースクール実施のほぼ一ヶ月前の7月1日に、改正反スパイ法が施行された。これは今年のサマースクールの順調な実施に手痛い打撃を与えた。日本の各種メディアが関連記事を報道し、アステラス製薬の男性社員が3月に拘束されたものの十分な説明がなされなかったこと、過去に北京で拘束され6年間の懲役刑を受けて帰国した日本人の『スパイにされた親中派日本人の記録』の内容等が詳報され、一気に緊張感が高まった。7月の時点で派遣する学生は、5月に実施した選抜試験で12名の精鋭に絞っていたが、そのうち1名が心身の不調のため7月の下旬に入ろうかという頃に参加をキャンセルする（そこまでの過程でもスタッフが身を削った）ことになると、堰を切ったように、中国の状況に深い懸念を抱いていた2名がさらにキャンセルの希望を申し出た。

10年以上継続してきた南京中国語サマースクールでキャンセルが出たのは前代未聞だった。しかもそれが3名も出たということに、スタッフ一同は深い衝撃を受けた。安価な飛行機のチケットでも安心できる便だと往復で10万円を下らない。（年度末頃に予定表にあがっていた南京直行便は30万円を超えていた。最終的に13万円程度。）キャンセル料も半端な額では済まない。しかも前代未聞ということもあり、キャンセル料を旅行社に支払う事務手続きも混乱し、大学の経理やキャンセルした学生とのやり取りに私は消耗した。

参加者は結局9名となりこれまでの最少の参加者数となった。南京大学海外教育学院で学ぶ留学生は全盛期から大幅に減ったらしく、また、渡航を予定していた日本の一部の大学も取りやめたとのことで、東大の派遣学生数も全盛期から半減したものの、従来以上に歓迎していただいたような印象がある。学生の感想にもあったが、学生はそうした今年特

有の状況下で幸運にも一人部屋をあてがわれた（来年度以降どうなるか現時点では何とも言えない）。そしてそれに応えて、今年の9名の精鋭は、3週間の研修を期待通り非常に充実したものにできたように私は思う。

通常なら中国語スキルの習熟度によって2クラスに分けて南京大学での授業は展開されるどころ、もともと9名しかいなかったの、クラスは1クラスに限定された。もちろん各人のスキルが全く同じということはないが、選抜試験を厳格に行なったからか、特に支障はなく、逆に参加者全員の意思疎通や親睦は大いに深まった。ここ数年間オンラインで実施した時も参加者の工夫と努力によって意外なほどまとまりがあった印象だが、現地で3週間の時間を共に過ごした少数の仲間との間で結ばれた絆の深さは何者にも代えがたい。彼らがこの研修の中で得たものは、中国語の高く幅広いスキルだけではないし、全身で体得した中国社会に対する深い理解だけでもない。（それらだけでもサマースクールを実施する意味が大いにあるが。）若い9名の東大生の中に成立したワクワクするような絆は、還暦を過ぎた私には、うらやましくも妬ましい。そして、引率教員や他のスタッフと共に、そうした若い東大生の中の絆を作り出すことができ、うれしいことこのうえない。

本報告集は、参加者による南京市内や南京の人々に対する観察記録として、また、東大生の中国社会認識が深まっていく過程を描いた記録として貴重であるばかりでなく、南京市内で活動する上で便利なtipsや気をつけねばならないポイントも記録されていて、この報告書自体が、今後のサマースクール実施（あるいは他の団体の中国研修）にとっても有用で参考価値の高い刊行物になったと思う。

とはいえ、来年のサマースクールがどうなるのか、現時点でまったく予断は許されない。企画書は例年同様の内容で、すでに国際研修委員会に提出したが、この報告書の内容が来年も有効かどうかは疑ってかかったほうが無難だろう。中国社会がコロナ禍や共産党大会のあと安定した社会になるという予想は、今現在覆されたかに見える。国際的に張り巡らされた人流・物流はウクライナ戦争やガザでの武力衝突によって断裂分断され、私たちの日常にも影響を及ぼしつつある。こんな事態を予測できた人がどれだけいるだろうか。中国政府は、反スパイ法のような強面で排外的な態度を隠すことさえしないが、中国の大学（特にゼンショー寄付金のマネジメント組織LAPが連携している南京大学と中国人民大学）は、コロナ禍以降逆に極めて積極的に東大に対して、より交流関係をさかんにしたいという熱烈なメッセージを送ってきている。東大駒場の学生には、今回のようなチャンスが今後も可能な限り提供されてしかるべきである。

2023年12月10日

執筆学生一覧

飯田 奈那（イイダ ナナ）教養学部・理科三類

印藤 直晃（インドウ ナオアキ）教養学部・文科三類

韓 美嘉（カン ミカ）教養学部・文科三類

木村 眞子（キムラ マコ）教養学部・理科一類

田中 渚（タナカ ナギサ）教養学部・文科三類

寺嶋 佑太朗（テラジマ ユウタロウ）教養学部・文科三類

仲本 梨乃奈（ナカモト リノナ）教養学部・理科二類

並木 勇輝（ナミキ ユウキ）教養学部・理科一類

松浦 知希（マツウラ トモキ）教養学部・文科一類

(2023年8月時点の所属)

2023年度 中国語サマースクール（国際研修）

協力

南京大学海外教育学院

担当教員

菊池 真純 東京大学大学総合教育研究センター・特任准教授
白 春花 東京大学大学総合教育研究センター・特任講師

責任教員

伊藤 徳也 大学院総合文化研究科・教養学部・教授

主催

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部グローバルコミュニケーション研究センター・トライリンガルプログラム（TLP）中国語
東京大学教養教育高度化機構国際連携部門リベラルアーツ・プログラム（LAP）

本研修は、株式会社ゼンショーホールディングスの寄付金による支援をいただいて実施されました。

2023年度南京サマースクール報告書

2023 年 12月初版印刷

編集 / 装幀 菊池真純

発行 東京大学教養学部

〒 153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 TEL 03-5465-7671

URL:<http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/> E-mail:admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp

表紙写真:南京大学校内（撮影・寺嶋佑太郎 2023年8月）